は何の役にも立たないと思ひましたから、わざと『へエー何てす、羽衣ですつて、イヤ私はそんな物は一向に存じませんが』と云ひましても、天人はなか〳〵承知しませんで『いくらお隠しになつても駄目です、先刻妾が三保の松原で羽衣を松の枝に掛け、四邊の名所を見物してる内に默つて持つて居らしたのは、正しく貴方に相違ありません』『いくら貴方がそんな事を仰しやつても駄目です、私は根がそんな事は知らないのですもの』『アラそんな嘘を言はないで返して頂戴な』『困りましたな、無い物を返せつて』と、漁夫はいくら天人が頼んでも返してやりませんけれども天人は羽衣が無くては天上へ歸へることが出來ないので、猶も根氣よく頼みますと、漁夫は怒つて『エ、五月蠅い奴だ、無い物は返されないワ』と云つて、其まゝ戸をピシリと閉めて仕舞ひました。

すると天人は悲しさうな聲で『ア、妾はどうしたらいゝだらう、こゝの家に有るに違ひないのに、あんな事を云ふて返して呉れないが、妾は羽衣が無くては天へ歸ることが出來ず、さうかと云つて何時迄も下界に居れば、もう天人では無いあゝ困つた事になつたものだ寧その事此の三保の松原から海へ身を投げて死んで仕舞つたがましかも知れぬ』と、果はオイ〳〵泣きながら、獨語を言つて居ます。

漁夫は家の中で天人の獨語を聞き急に氣の毒になりましたので早速表の戸を開けて『オイ天人さん！全く私が悪るかつた、幾重にもゆるしてお呉れ、成る程お前さんの羽衣は、私が拾つたに相違ないだが餘り見事な物だつたので、一寸した出來心で悪い事をしました今はすつかり思ひ切つて、改めてお返し致します』と、奥の一間に仕舞つてあつた羽衣をば、惜氣もなく天人に渡して『さアお前さんは之れを着て、早く天へお歸りなさい、さぞ皆樣が待つていらつしやいませう』と、以前に引替えて、親切に云ひますと、天人も大喜びで『どうも誠に有り難う御座いますお蔭て天へ歸られます、して漁夫さん此のお禮には、貴方が羽衣を賣るよりも、もつと〳〵よい利益をさせて上げませう』と、天人は羽衣を着て、やがて朝日の登ると共に悠々として、雲井遙かに舞ひ上つて仕舞ひました。

其後此の漁夫は俄に運が向いて參りまして、間もなく日本一の大福長者となりましたとさ。

(三) 瘤取り

先づ或る所に一人の老人がありましたとさ、此の老人は右の頬面に、大きな瘤がありまして、どうも何をするにも邪魔になつて仕様がありませんので、どうかして取つて仕舞はうと色々手を盡しましたが、瘤は段々大きくなるばかりで、少しも癒りません。

或日の事老人は、近所の山へ柴刈に出て、日暮方に家へ歸らうとしますと、いつの間にやら空が曇つて、やがて大粒な雨がポツリ〳〵と降つて參りました。老人は驚いて『ヤア之れは大變なことになつた、何處かに休む所は無いかしら』と、彼方此方見廻しますと、運よくも其側に一本の大木があつて、而も其根の所が空洞になつて居ります。

『アゝめた！此の空洞の中へ這つてれば雨に濡れやしない』と、急いで入りましたが、雨は止む所か次第に酷く成り、殊に電光がするやら雷が鳴るやらで、老人は怖くて堪まらず兩手で耳を抑へながら、頻りに桑原々々と云つて居りましたが、元より夕立の事ですから間もなく雲足が切れて雨も小降りになり、彼方の山の陰からは、チラと夕日がさして來ました。

其所で老人は漸く生き回つた心地『やれ〳〵どうやら雨も霽れた樣だ、今の中に出掛けるかな』と、獨語を言ひながら、空洞を出ますと、何だかドタバタと大勢の足音がします、老人は心の中で、さては外の樵夫達も、今歸る所と見える、連が有つて幸福だ』と、木の間を透して見ますと、さア大變な者がやつて來ました、樵夫達だと思つたのは、一ツ目小僧、一本角、三ツ目鰐口と云ふ樣な、恐ろしい鬼共が、百人ばかり行列をつくり、ゾロ〳〵として參りました。

之れを見た老人は、キヤッと云つて其場に尻餅を搗いたきり、やゝ暫くは立つことも出來ませんでしたが、幸に鬼共には、自分の姿を見られませんでしたから、やつと胸を撫て下し、空洞の中に潜り込んで小さくなつたまゝ、默つて樣子を見て居りました。

すると空洞の外では例の鬼共が頻りに陽氣付いて、何だか面白さうな歌なぞ謠ひ出しましたので老人は思はず少し頭を擡げ『オヤッ何だらう表は大層な賑か

さだ、一體あの鬼共は何をして居るのだらう、一寸覗いて來てやらう』と、老人はノコ〳〵這ひ出して、表の樣子を窺ひますと、こゝには先刻の鬼共が大將と思はる大鬼を眞中にして、家來共は右左に從ひ、今や酒宴の最中で、唄ふもの、囃すもの、踊る者、夫れは〳〵大騒ぎをして浮かれて居ます。

『ハヽア解つた〳〵、今日は怪物の懇親會だな、こいつは面白いものを見たぞ』と、根が氣樂な老人ですから先刻の怖さは何處へやら段々調子に乘つて果ては自分も浮れたくなるばかり、外では大將の大鬼が、大きな盃でガブ〳〵酒を飲みながら、家來の鬼の踊をば餘念なく見て居りましたが、やがて大聲あげて『貴樣達の踊はいつ見ても同じ事で、少しも興がない、もつと變つた新奇なものは無いか』と云ひますので、例の老人は不圖思ひ出した樣に『待てよ、夫れならば己が一番本事を見せてやらう、イヤ〳〵うつかり外へ出ちやア大變だ……とは云ふものゝ根が踊好の鬼共、己が甘く踊つて見せりやア、まさかに食ふ樣な事も有るまい、何事も度胸が第一、やつて見ろ！』と、鬼の囃子の面白さに、老人は思はずも浮かれ出して、コリヤ〳〵アと云つて、一座の中へと踊り込みました。

鬼共は思ひも寄らぬ處へ、人間が踊り込んだものですから、却つて膽を潰して仕舞ひ、暫くは呆氣に取られて居りましたが、老人は又一生懸命こゝで下手をしやうものなら、忽ち命にかゝる一大事だと、兼て覺えた踊の手、出るに任せて夢中になつて踊りました。

『コレは恐入つた』『イヤ實に巧みなものだ』と、鬼共は瞬きもせずに、頻りに感心して居りましたが、やがて踊が濟みますと、大將の鬼は改めて老人に向ひ『ヤア御苦勞々々〳〵、お蔭で大層愉快だつた、さア先づ一杯やれ』と、大きな盃を出しますから、老人は怖々ながら夫れを頂き『餘りの面白さにツイ浮れ出して、御酒宴のお妨げを致しました所、却つてお褒めのお詞を頂き有り難き幸福に存じます』『イヤお妨げ所か其方の踊は實に面白く、大に興を添へたと云ふもの、此の後とても又時々來て巧みな踊を見せて呉れよ』『重ね〳〵の御褒に預り忝く存じます、拙い業も御意に叶つたとあらば幾度にてもお目に掛けますで御座いませう』『さらば明日の晩も亦來て呉れるか、屹度參るか』『ハイ必ず參上致します』『去り乍ら只では歸すこと相成らぬ、屹度明日も來ると云ふ證據に、何か質を置いて行け』

樵夫は瘤を如何したか

『さらば何なりとも置いて參ります』『して其質には何がよからうかな』と大將は首を傾けますと今迄此の問答を聞いて居た一人の鬼は『恐れ乍ら申し上げます、總じて質に致しますには、一ばん大切なる物を取るので見受けます所に依れば、此の老爺には右の頰に、大なる瘤が御座ります、瘤は福の物と申して、人間は殊に大切に致すとか、即ち之れをお取りになれば瘤が惜しさに必ず明日も參るて御座りませう』と、さも物知顏に述べますと『成る程夫れはよい所に氣が付いた、さらば瘤を取つてやれ！』と、大將の一令の下に家來共は老人を抑へて、例の大きな瘤を根元から捻り取つたまゝ掻き消す如くに何處かへ失せて仕舞ひました。

老人は夢に夢見た心地して『何の事だい』と、暫く茫然して居りましたが、常日頃から荷厄介にして居た瘤は影さへ無くなり、夫れに痕迄が痛くも何とも有りませんので『こいつは有り難い』と、急に輕くなつた頰面を撫でながら、急いて家へと歸りました。

家では又老婆が待ち兼ねてどうしたらうと心配してる所へ老人がひよつこり戻つて來ましたので安心して其顏を見ますと今朝家を出る時には確かに有つた右の頰の瘤が、奇麗に無くなつて居ますから老婆は驚いて『アラ！お前さんは瘤をどうしなすつて？』と尋ねますと老人は得意顏して『ウン之れには仔細の有る事だ』と、茲で山からの歸りに、鬼に出逢つて瘤を取られた一條を、事詳かに話して聞かせますと、老婆は

非常に感心して『夫れはまア何にしてもいゝ事でしたが鬼共はそんな物を取つてどうするでせう』と果ては二人て大笑ひを致しました。

茲に又其の隣に丁度同じ年頃の老人が有りましたが之れは左の頬面に大きな瘤が御座いまして頻りに荷厄介にして居た處が此の話を聞いて非常に羨ましがり早速此所の家へやつて参りまして『老人さん！お前は昨日鬼に逢つて瘤を取つて貰つたと云ふ話だが夫りや本當かね』『アゝ本當だとも之れ此の通りだ』成る程さうかねぢやア私も之から行つて取つて貰はうと思ふが一體何處へ行けばいゝのかね』『さア夫りや行つて見るがよい』と茲で親切に道筋やら空洞やら又踊の事まで委しく話してやりますと隣の老人は喜んで例の左の頬の瘤を抱へ、スタ〳〵山へ登つて行つたのです。

さて教へられた通り空洞の中へ入つて鬼共の出て來るのを今か〳〵と待つて居りますとやがて日の暮方に大勢の鬼共がやつて來て昨日の樣に酒宴を始めました中にも大將の大鬼は頻りに四邊を見廻し乍ら『もう昨日の老爺がやつて來さうなものだ』と待ち兼ねて居る樣子ですから、こゝぞと隣家の老人は空洞の

中から踊り出し『これは〳〵大將樣老爺奴先刻からお待ち申して居りました』とお辭儀をしますと大將は『オゝ昨日の老爺か、よく來て呉れた、さア早く面白い踊を見せて呉れよ』『承知致しました』と隣家の老人はバラリと扇子を開いて踊り初めましたが、根が踊などを習つた事のない者てすから、只出鱈目に跳ね廻る計り、少しも面白くは御座いません鬼共は之れを見て『何だ此の踊の拙さは』『昨日とは丸て別物の樣だ、こんな武骨な老爺には用がない、質の瘤を返してさつさと追拂つて仕舞へ』と頻面目がけて打ちつけましたから可哀想に隣の老人は、右と左に瘤が出來丁度瓢箪の樣な顏を抱へて、ホウホウの體で逃げ歸りましたとさ。

隣の老人は瘤をとられたか

(四) 一寸法師

昔し攝津の難波と云ふ處即ち今の大阪の町に、老人の夫婦が御座いましたが、二人の中に未だ子供が有りませんので常日頃から子供を欲しがりどんな豆の樣な子供でもいゝからと、或日二人は相談して、住吉の明神樣へ願かけに參りました『どうか明神樣どんな小さな豆の樣な子供でもよろしう御座いますから、一人

お授け下さいまし』と、二人が一心になつて拝みました。すると住吉大明神も、可哀想に思召して『夫れ程迄に子供が欲しいのなら一人授けてやらうと仰しやいましたので、二人はもう大喜び、ニコ〳〵して家へ歸つて参りますと、阿婆さんは忽ち懐姙になりまして、丁度十月目に一人の男兒を産み落しました。

所が不思議です、其子供の小さいことは、丸で拇程しかありません、二人は一時は驚きましたが併し最初神樣にお願ひ申した時、どんな小さな兒でも宜しいからと云ふたのですから、今更何とも仕方がないと、其名も一寸法師と付けて、可愛がつて育てゝ居りました、けれども不思議や、いつ迄經つても大きくは成りません、兎角する内に十二三になりましたが、矢張り産れた時のまゝですから、流石の二人も之れには愛想をつかして『マア明神樣も氣の知れぬ人だ、同じ子供を下さるのなら、普通のものを下さればよいに』と果ては神樣を怨んで居りました。すると又此の近所でも『ヤレ一寸法師が泣いてる』の『ソラ豆粒が歩き出した』のと、碌な事を云ひませんので、今は阿爺さんも我慢が仕切れず、或日阿婆さんとも

相談して、一その事に一寸法師を何處かへ捨てやうと云ふ事に成りました、で早速一寸法師を膝下に呼びよせ『一寸法師や、お前はなぜいつ迄も大きく成らないのだ、己もお前の親であるから、決して可愛くない事は無いが、どうもお前の樣な不具者は、家に置くことならぬから、誠に氣の毒だが今日から何處へでも出て行つてお呉れよ』と云ひ聞かせました。

すると一寸法師は、至つて大人しい子供ですから『ハイ左樣ならば出て參ります、だが、お父さん！私にお母さんの縫針を一本下さいませんか』『ナニ！縫針が欲しいと、そんな物を貰つて何にするんだ』『私は刀に致さうと思ひまして』『ウムさうか成る程お前の刀にはいゝだらう』と云ふがまゝに、縫針を出してやりますと、一寸法師は麥稈で以て柄と鞘とを造り、之れを腰に刺しまして、今度は又お母さんに『お母さん！お願ひで御座いますお椀とお箸とを下さいまし』『ナニお椀と箸と、お前は夫れを如何するのだ』『ハイお舟にして乘つて行かうと思ひます』『成る程お前の舟には丁度いゝだらう』と、お母さんはお椀と箸とを出してやりますと、一寸法師は喜んで『ぢやアお父さんお母さん、隨分御機嫌よろしう』と暇乞を

一寸法師は兩親から何を貰つたか

して家を出て仕舞ひました。

さても一寸法師は、難波の浦からお椀の舟に乗り出し箸の櫂て漕ぎながら、何處を的ともなく漕ぎ廻りましたが又考へまして『何でも京と云ふ所は、日本一の都と話にも聞いてるから彼所へ行つたら又面白い事も有るだらう』と、夫れからは一途に京の方へと漕ぎ出しました。

元より小さな一寸法師が、お椀の舟を漕ぐ事とて、捗が行かう筈なく、或時は河傍の石垣の陰に泊まつたり、或る時は又橋杭に舟を着けて夜を明かしたりして、やう〳〵一月程後に目指す京へと着いたのです。

其頃京と云へば丁度今の東京の様で、天子様の御住ひになつて居る所、町の賑かな事立派な事、初めて見る者の目には、只驚くばかり、一寸法師はうか〳〵と町の中を見物して歩いて居りましたが、やがて大きな御門のある、立派な家の前へ出ました、之れは三條の宰相殿と云つて、豪い人のお邸て有りました。

一寸法師は御門からずつと中へ入りまして、玄關の所まで行き、大きな聲をして『お頼み申します』と云ひました丁度其時宰相殿には、玄關の傍に居らつしやいま

したが、此の聲をお聞きになつて『ハテ誰だらう』と御自分て出て御覽になると、丁度玄關に置いてある下駄の下に、箱人形かと思はれる様な小さな小僧が一人立つて居りますから『イヤ之れは不思議な奴が舞ひ込んで來たぞ、コレ〳〵小僧！お前か今大きな聲をした者は』と、お尋ねになりますと小僧は丁寧にお辭儀をして『ハイ私て御座います』『小さな奴だなしてお前は一體何者だ』『私は大阪から遙々參つたもので御座います、名は一寸法師と申すので……』『ハヽヽヽヽ成る程一寸法師に違ひない處で一體何しに來たか』『ハイ私は阿父さんに追ひ出されまして、何處へも行く所が御座いません誠に申兼ねますが、どうか私をお邸へ置いて下さいませんか』と頼みますと、宰相殿には暫くお考へに成り『成る程夫れは氣の毒な話ぢや、一體お前の様な小さな男は何處を探したとて有りはせぬ、面白いから置いてやらう』と、直にお許が出て、一寸法師はいよ〳〵お邸に置いて貰ふ身となりました。

一寸法師は體こそ小さう御座いますが、中々智慧のある子供て、何をさせて見ても、氣が利きますので、お邸でも皆が可愛がつて、一寸法師々々々々と大切に扱つ

て居りました中にも宰相殿のお姫様は殊の外此の一寸法師がお氣に入て何處へお出でになるにも、お供になさいましたが、或る日例に依つて清水の觀音様へ御參詣になりました。

所が其歸りに、丁度お堂の石段の下に、大きな恐ろしい鬼が二匹、お姫様を取つて食はうと待ち伏せて居たのです、神ならぬ身のお姫様は、さうとは知らず、其石段の所までおいでになると、二匹の鬼はワッと云つて、突然お姫様の前へ飛び出しました、お姫様は肝を潰して逃げやうとすると、鬼は急いで追かけて來て、攫み殺さうと致します。

すると一寸法師は此の時ぞと、腰の縫針の刀の鞘を拂つて、鬼の前え斬つて出ますと、鬼は笑ひながら、譯なく一寸法師を摘みあげて、其まゝ丸飲みにして仕舞ひますと、何しろ體が小さう御座いますから、思ふまゝに鬼の腹の中で荒れ廻り、例の刀で以て散々に腹を突きました何ぼ鬼でも之れには閉口して『アッ痛たゝゝッ痛たイッ』と云ひながら、ゲヘンと咳をしますと、其勢で一寸法師は再び外へ飛び出しましたが、之れを見た今一匹の鬼は、己れ逃がしてなるものかと、突然つゝ

んで口へ入れますと、一寸法師は咽から鼻の孔へ脫け出して、今度は鬼の目の玉を突いて〳〵突き破つて仕舞ひました。

此の目覺しい働には流石の鬼も舌を巻いて『こりや飛んだ奴に出食したものだ、此の上怪我でもしちやア詰らない、逃げるが勝だ〳〵』と、一目算に逃げ出して仕舞ひました。

かくと見た一寸法師は隅の方に小さくなつて慄へて居るお姫様に『もう御心配は御座いません、鬼は遠くへ逃げてしまひましたから、ゆる〳〵歸ると致しませう』と申し上げますと、お姫様は大喜び、丸で地獄で佛に逢つた様に『ヤレ〳〵嬉しや、お蔭で命拾ひをした、家へ歸つたらお父さまによく申上げて、御褒美を貰つて上げやうネ』と、お姫様は一寸法師を從へて、さてお歸りにならうとしますと、丁度其路傍の所に、小さな槌が一つ落ちて居ります『オヤ此所に槌が落ちてるよ、大方鬼めが落して行つたのだらう』と、お姫様は夫れを拾ひ上げると、一寸法師は不思議さうに『お姫様！夫れは何で御座いますか』と尋ねます、するとお姫様は笑ひながら『之れは打出の小槌と云ふものだ、何でも自分の欲しいと思ふ物は此の槌を

振れば出て來るのだ、だからお前欲しい物が有るなら云つて御覽よ、私が振り出して見せるから』と云ひますと、一寸法師は暫く考へ『お姫樣！私は別に之れと云ふて欲しい物も御座いませんが、只一つ體の丈が欲しいのです』『オヽ成る程お前の樣に小さくては、さぞ不自由だらう、ぢやア丈を振り出してやらう』と、お姫樣は例の小槌を振り乍ら『丈出ろ！丈出ろ、一寸法師の丈出ろ！』と云ひますと、不思議や見る〳〵內に、一寸法師の體がムク〳〵と大きくなつて、立派な男になりました『こいつは有り難い今日からはもう一寸法師では無いぞ』と、一寸法師ではない大男は、躍り上つて嬉しがりますと、お姫樣も大喜び、直とお邸へお歸りになると宰相殿にも不思議な事に思召して、早速此の旨天子樣へ申し上げますと、天子樣にも大層御感心遊ばして、一寸法師を御所へお召しになり、種々な下賜物を賜りました、之より一寸法師は次第に出世を致しまして、後には堀川の少將と云ふ、豪い人になりましたとさ。

一寸法師の出世

(五) 玉取り

昔し大織冠藤原鎌足と申す、豪いお方が御座いましたが、此の方に一人のお姫樣がありまして、名を光白女と申されました、此のお姫樣は唐の國へお嫁入り遊ばして、高宗皇帝と云ふ天子樣のお妃にお成りなさいました。

其時の事で御座います、此のお姫樣は、奈良の興福寺と云ふお寺が、御自分の氏寺なので、今度お妃にお成りになつた御祝儀に、花原磐、泗濱石、面向不背の玉と云ふ、三個の寶物を其寺へ納めやうと思召したのです、一體此の花原磐と云ふ物は、石で作つた鳴物で、一度打てばいつ迄も音のするもの、又泗濱石とは硯の名で、之れは水を入れなくても、いつも墨があると云ふ不思議な硯、次に面向不背の玉と云ふのは、水晶の樣な奇麗な玉の中に旃檀と云ふ結構な木で彫んだお釋迦樣の像があり、而も夫れがどちらから見ても、正面に見えると云ふ稀代な名玉で御座います。

其所で光白女は此の三個の寶物をば萬戶將軍と云ふ豪い大將に言ひ付けて、わざ〳〵日本の興福寺へ持たせておよこしに成りました、で萬戶將軍には此の三個の寶物を大切に持つて、大きな船に乘り込み、日本の國へとやつて參りました。

寶物ほどうなつたか

其途中丁度讃岐の志度の浦と云ふ所迄來ますと、急に天氣が惡くなりまして海が荒れ出しました萬戸將軍は知らない國へ來て、萬一難船でもしやうものなら、夫れこそ一大事だと、如何かして早く陸へ着き度いものだと思ひましたが、雨と風とは横から吹き付け、又大浪は下から捲き上げると云ふ有樣で、船中の者は誰一人として生きた心地は有りませんでした。

所が其中に漸く雲が切れて風も收まり、從つて海も大層靜かに成りましたので、萬戸將軍は船を近所の陸へ着けて、ホッと一息つきますと、さア大變です、光白女から預かつて來た寶物の中で、一番大切な面向不背の玉が見えないのです。

考へてみると、先刻の騒動の中に海へ落したに違ひ無い、折角此所迄持つて來たのに今無くしたと有つては何とも申譯のない事だ、如何したらよからうかと、流石の萬戸將軍も青くなりましたが今更如何する事も出來ませんので、早速此の事を鎌足公へお知らせ致しました。

すると鎌足公も大變御心配なさいまして、夫れは定めし海の底の龍神が玉を欲しさに海を荒して盜み取つたに違ひない、憎い龍神の仕業如何にかして取返し

てやる』と、御自分でわざ〳〵讃岐國へとお出になりました。

其所で鎌足公は、先づ大勢の漁夫を濱邊にお集めになり『何と其方達の中で、之れより海の底に行き、あの玉を取返して來る者はないか若し玉を取つて來る者があらば褒美は幾許でもやるぞ』と仰しやいました。

之れを聞いた漁夫共は、吾こそ其玉を取り返して、御褒美を戴くぞと、皆々〳〵海へ飛び込みまして、彼方此方搜しましたが、どうも思はしく見付かりませんので、やがて頭を掻きながら、陸へ上つて仕舞ひました、之れには鎌足公も的が外づれて、ハテ如何したらよからうと、暫く腕を組んでじつと、お考へになつて居ります。

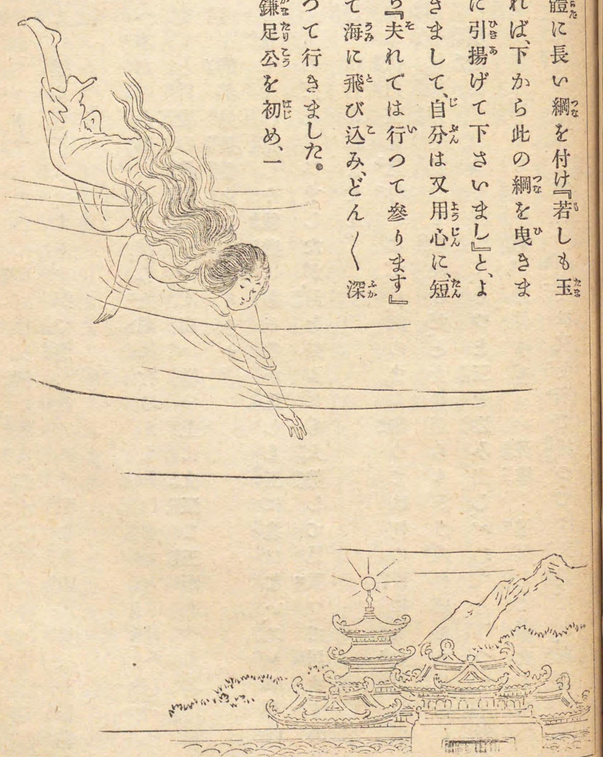
すると此の大勢の漁夫の中から、一人の海女が小さな子を抱いて、恐る〳〵鎌足公の御前に出まして『私は永年此の濱邊に住んで居る海女で御座いますが何卒玉取りの御用を仰付け下されまし』と云ひます、見れば誠に弱々しい女で、其上子供なんぞ抱いて居りますから、鎌足公も不思議に思召し『其方は女ではないか男でさへ彼の樣に歸つて來るのに、其方は大丈夫取れる氣か』と、お尋ねになると『ハイ仰せの通り私は弱々しい女で御座いますが若し私のお願をお聞き取り下さ

いますならば必ず玉を取り返して参ります』と、立派にお答へ致しました。

鎌足公はお點頭きなさいまして『オ、夫れは元より聞き届けてやるが、一體どう云ふ願なのだ』『夫れは他でも御座いません、此所に居ります、此の子供の事で御座ります、親の私は漁夫風情の賤い稼業をして居りますが、せめて此の子供丈は、人なみの人間にしたいと思ひます、したが斯様な貧乏人の事で御座いますので、手習一つさせる事もならず、此のまゝに致して置きますれば、矢張漁夫で終るのですが、夫れが如何にも不憫さに、之れが大きくなりましたら、貴方樣の御家來に遊ばして、武士の仲間へお入れ下さいまし、お願と申しますのは之ればかり、此の事をお聞屆け下さいますなら妾の命は無くなつても玉は屹度取り返して御覽に入れます』と、委しく譯を話しますと、鎌足公も早速御承知なさいまして『ウン夫れは何より易い事、其方が首尾よく玉を取つて來れば、子供は立派な武士にしてやる』『あの……武士にして下さいますか』『してやるとも〳〵』『夫れは有り難う御座います、では直に行つて取つて參ります』と、海女はさも嬉しさうに早速支度に取り掛りました。

さて海女は體に長い綱を付け『若しも玉が取れますれば、下から此の綱を曳きますから、直ぐに引揚げて下さいまし』と、よく頼んで置きまして、自分は又用心に、短刀を一本持ち『夫れでは行つて參ります』と、暇乞をして海に飛び込み、どん〳〵深い所へと潜つて行きました。

陸の方では鎌足公を初め、一同は『どうぞ甘く取つて來ればよいが』と、氣を揉んで胸を騒がせ、一心に



海の上を見詰めて居りました、海の中では又例の海女が水を掻き分けながらだん〳〵奥の方へ進んで行きますと、やがて遙か彼方に立派な御殿が見へ出しました。

さては龍宮へ來たのか、事によつたら此處に有るかも知れないと、其傍へ行つて方々見廻しますと、御殿の眞中の一ばん高い塔の上に立派な玉があつて、其傍には恐ろしい龍や鰐が見張番をして居ります。

海女は之れを見て、やれ嬉しや彼處にあるのが正しく玉に違ひない、アヽ早く行つて取り度いものだと思ひましたが、何を云ふにも大勢して見張つて居ますので、うつかり傍へは行かれません。

さうかと云つて折角玉を見付けながら、此のまゝ歸つては何の役にも立たぬ、さうだ其處の用心に、短刀を持つて來たのだ、と女ながらもかう成ればもう生命がけ、やがて塔の頂邊まで上つて行つて、そつと玉を盜み出し、攻めたと思つて一散に逃げ樣としますと、早くも龍や鰐が見付けて『コン泥棒！逃がして堪まるものか』と恐ろしい見脉で追つて來ます、海女は又此所で捕つては大變だと、用意の短

刀を打ち振り〳〵、一生懸命に防ぎ戰ひましたが、何しろ對手は大きな奴許り、そんなことには少しも驚かず、猶も飛びかゝつて一呑にしやうと思ひますので、もう耐らないと例の短刀で、突然自分の乳の下をズブリと切り立て、ダク〳〵血の出る創口へ手早く玉を押し込んで仕舞ひました。

すると龍宮では死人を見るのを嫌ひますから、龍や鰐も血を見て驚き、其まゝ追駈けて來ませんでしたから、海女は早速合圖の繩をグン〳〵曳きますと、陸の方では先刻から、頻りに心配をして居りましたが、やがて繩を引きましたので、ソレッ！と云つて急いで引き上げますと、不思議や海の水が次第に赤くなつて來るのです。

おや之れは變だぞと思ひながら、急いで引き上げますと、以前の海女は紅く血に染まつて上がつて來ました、見ればもう正氣は有りません、今死なしてはならんぞと、寄つてかゝつて水や藥を飲ませますと、海女はやう〳〵に息を吹き返し、苦しい中から乳の下の創口に入れて置いた玉を攫み出し、之れを鎌足公の手に渡し『ど、どうか子供を、よろしくお願ひ申します』と、息も切れ〳〵に云ひますと、

鎌足公は喜びながら『出來した〳〵安心せよ子供は己の家來にして立派な武士にしてやるぞ』と仰しやいますと海女は夫れを聞いてさも嬉しさうに、苦しい息の其中から、ニッコリ笑つて、其まゝ死んで仕舞ひました。

鎌足公は之れを御覽になり『さて〳〵可哀さうな事をした、我が子を武士にしたいばかりにか弱い女の身で以て龍宮迄も行き命を捨てゝ玉を取つて來たとは、如何にも感心な女だと頻りにお褒めなさいまして、やがて此の海女をば丁寧に葬り又其子は都へお連れに成り大切にお育ての上、大きくなつた後には、お母さんの願ひ通り立派な武士になりましたとさ。

(六) 出世息子

昔し或る所に一人の百姓がありましたが、たつた一人の息子をばどうかして人並すぐれた豪いものにしやうと京へ出して修業をさせました、所が此の息子は本を讀んだり算盤をする樣な事は大嫌だと見えまして、只毎日犬の鳴のや烏の眞似や、又は蛙の音の稽古をして、やがて漂乎家へ歸つて來ました、親の身ては、どうかして充分に學問をさせ樣と、一心こめて居たのに、息子はどう云ふ心得違か、役にも立たぬ事を覺えたまゝ、ずご〳〵歸つて來たものですから、親の百姓は大きに腹を立てゝ、忽ち息子を勘當して、家を追ひ出して仕舞ひました、勘當とは家を追ひ出して、一切入ることの出來ない樣にすることです。

さて息子は、意外にもお父さんの怒にふれて、其まゝスゴ〳〵と家を出ましたが、別段何處へ行かうと云ふ的のある事でも御座いませんから、只ボンヤリ歩いて行く內に、もう日が暮れて仕舞ひました。

所がこゝは田舍の山の中で、泊らうと思つても家はなく、里へ出やうと思つても相憎くお腹が空いて、少しも歩かれませんから、仕方なしに路傍の辻堂に休み、兎も角今夜はここで寢やうと、かう覺悟を定めて居りますと、丁度山からの歸り路と見えて、二人の樵夫が通りかゝりましたが、息子の居るのを見てツカ〳〵と其傍により『コレ〳〵お前さんはこんな所で何してるのだ』と尋ねますと息子は『ハイ私は旅の者だが、今夜は此の辻堂に泊まる心算です』二人の樵夫は之を聞いて目を丸くし『ヘーツ今夜此の辻堂で泊まるッて飛んでも無ェ事云つたものだ成

辻堂には何が出るか

る程お前さんは旅の者だから何も樣子を知るめエが、こんな怖い處に泊まることは止しなせエ』『夫れぢやア此の辻堂には化物でも出るのかエ』『何さ怪物ぢやない、お前さん知らなきア話さうが、一體此の山には性の悪い山犬が澤山居て、夜になるとこゝへ出て來て、ワン〳〵吠へながら人を殺すのぢや吾達も夫れて日が暮れかけると急いて山から歸るのぢや、本當に劍呑だから早く逃げなせエ』と、二人は頻りに勸めます、併し息子は對手が犬丈に、度胸を据へまして『イヤ夫れは御親切に有り難いだが私は少々了簡があるから今夜は矢張りこゝに泊りませう』『ではお前さんは犬が怖かないの』『エ、犬はチットも怖かない實は却つて心易い方です』『夫れぢやお前さんは矢張り犬の同類だらう、そいつは大變だ食付かれぬ内に逃げろ〳〵』と、二人の樵夫は眞青になつて、急いて逃げ出して仕舞ひました。

さて息子は其後で、一人辻堂の中に入り、古疏にくるまつて、ソロ〳〵眠りかけました、丑角する内に日は全く暮れて、遠寺で鳴る鐘の音も物凄く、夜は早や十時近くなつたと思ふ頃、噂に違はず遠くの方で犬の吠える聲が致しましたが夫れが

段々近く成ると思ふ間に成る程先刻樵夫の話した通り、辻堂の周圍を取り巻いて、ワン〳〵ワン〳〵吠え出しました、さてはいよ〳〵來たのかと息子は急いて起き上り、戸外の犬の鳴き聲を耳を澄まして聞いて見ると、こは抑も如何に其鳴聲は悪い事ではなく《ワン〳〵此の辻堂の床下には、お金が澤山埋けてある、がうして置くのは勿體ない、早く掘り出せワン〳〵ワン》と云ひますので、息子は聞いて嬉しがり『して見ると此の辻堂の床下にはお金が埋けてあるのに誰も知つてる者がないので、犬が獨りて勿體ながり出して使へと云ふのに違ひない』と、肯きながら戸外に出て、かう云ふ時こそ、豫て學んで、置いた犬の學問が役に立つのだと『オーイ〳〵犬の衆、大きに御苦勞であつた、今夜は私が掘り出して持つて行くから安心しろ〳〵』と云ひますと、犬共も喜んで『オヤ此の人は犬の言葉が解る、かう云ふ人に使はれたら、金も嘸滿足するだらう、そして己等も大滿足だ』と、やがて犬は別れ〳〵に何處かへ行つて仕舞ひました。

犬の歸つて行つた後で、息子は早速仕度して、先づ辻堂の根太板を、メリ〳〵と剝ぎ取り、下の土を掘り初めますと、未だやつと一尺程も掘つたかと思ふ頃、ピカッ

！と光るものが見えます、やめた！と息子は勇み進んで、其光る物を手に取つて見ますと、果して之れは本物の小判、こいつは何しろ有り難いと、猶も一生懸命に掘り下げると、出るは〳〵、何百兩とも何千兩とも算へ切れぬ程出て参りました。けれども餘りに慾張つて掘つた所で、一人では迚も持ち切れませんので、いゝ加減にして掘ることを止め、又無くなつたら取りに來ればいゝと、後は元の通りに土を被せて、やがて其掘り取つた小判をば、風呂敷に入れて脊中に負ひ、辻堂を出やうとすると、夜はほの〳〵と明けて鳥の聲がカア〳〵と聞えます。

『さては最う早や夜が明けたと見えるな』と、息子は空を眺めながら、二足三足歩き出しましたが、餘りに鳥が喧ましく鳴いて居ますので、何を饒舌つてるのかと、耳を澄ましてよく聞けば、一羽の烏の云ふ事にや《悲しいな〳〵、昨夜將軍樣がおかくれに成つて、京の町は大騒ぎ》次の一羽の烏の云ふ事にや《所がお世嗣がない爲に誰に跡を取らさうかと、御家來衆は大心配》次の次の一羽の烏の云ふ事にや《だが今の將軍樣は、見掛けに依らぬ貧乏で、お葬式も出來ない始末、此の際誰かお金を献上する者は、早速世嗣に取り立てるとの評判おや》と、口々に噂をして居ます

ので、息子は聞いて手を打つて喜び『イヤ之れは好い事を聞いたぞ昨夜將軍樣が亡くなつた、所が相悪くお世嗣がない、夫れに近頃將軍家は、見掛けに依らぬ貧乏だから、誰でも構はずお金を澤山持つて行つた者には位を譲る……さて〳〵これは有り難い』と、息子は又辻堂に取つて返し、金の有ッ丈を掘り出して、ウンと脊負つて京の町へと出掛けました。

さて出掛けたものゝ、京へ行く道が解らない爲、トウ〳〵山の中で道に迷ひ、どうしたらよいかと、茫然考へて居りますと、谷底で蛙が鳴いて居りますので、こいつに聞いたら解るだらうと、急いで其傍に行き『蛙さん！京へ行くには何處から行くがいゝだらう』すると蛙は『右だ〳〵』と教へて呉れましたから、夫れから早速道を急ぎ、解らなくなれば田圃や池の蛙に聞いて、とう〳〵目ざす京の町へと着き、早速將軍樣のお邸へ出て、あの澤山のお金を献上しますと將軍家でも大喜び、直と息子を取り立てゝ世嗣にしたのでありました、息子は土百姓から一足飛びに大出世を致しましたが、之れも全く犬と鳥と蛙とのお蔭だと云ふので、自分が將軍樣になると共に、國々へお布令を出しまして、此の三つの物は屹度殺生する事

相成らぬと、云ひ傳へたと云ふことであります。

信濃の國の殿樣はどう云ふ人か

(七) 姨捨山

信濃の國に姨捨山と云ふ山が御座いますが、此所は昔しから月の名所で、今でも明月の夜には、わざ〳〵遠方から、月見に出掛けます、なぜ此の山を姨捨山と申しませう、夫れにはなか〳〵面白いお話が有るのです。

昔し信濃の國に一人の殿樣が御座いましたが、此の方は誠に奇麗好で汚い物が大嫌ひですから、人間でも年が老つて、皺でも出來ると、そんな汚い物は見るも嫌ひだと、少しもお側へ寄せつけず仕舞には國中へお布令を出して、婆さんや爺さんの年老つて汚いものは、みんな片ッ端から殺してしまふ樣にと、嚴しく言ひ付けました。

すると丁度姨捨山……尤も其時分には勿論さう云ふ名の山では無かつたでせうが……其山の近くに一人の百姓が有りましたが、此の家にも一人のお母さんが有つて、最早や大分年を取つて居ますから、殿樣の御布令に從つて殺して仕舞

はなければなりません。

けれども此の百姓は、眞に親孝行な男ですから、いくら殿樣のお命令だとて、現在自分の親を手にかけて殺すことはどうしても出來ません、さうかと云つて此の儘にして置けば殿樣の方から役人が來て、殺して仕舞ふに違ひ有りません、これは如何したら好からうかと、百姓は種々考へた末に、何でも人の知れない所へ捨てゝ來るがよいと、或る晩お母さんを負ひまして近所の山へと出掛けて行きました。

所が丁度其晩は、十五夜で御座いましたから、鏡の樣なお月樣が、キラ〳〵と照らして、丸で晝の如くに明るいのです、百姓はお母さんを負つたまゝだん〳〵山へ登つて行きますと、何と思つてかお母さんは、途中の木の枝を折つては、路へ捨てますので、百姓は不思議に思ひ『お母さんは何をなさいます?』と聞きますと、お母さんは只笑つてるばかりで何とも答へません。

やがて間もなく山の絶頂へ來ましたから、百姓はお母さんを其所へ下し『さてお母さん! 貴方も御存じの通り、殿樣のお布令で、私は貴方を殺さなければ成りま

せんが子の分際として如何して親を殺すことが出來ませう、そこで致し方が御座いませんから、今晩は貴方を此所に捨てゝ參るので御座いますが、どうぞ勘忍して下さいまし』と、百姓は泣きながら申しますと、お母さんはもう覺悟を定めて居りますから、別段惡い顏もせず、私の樣な老人は、もう何の役にも立たないから、何所に居たとて同じ事だが、お前は未だ年も若いから、隨分仕事に精を出して、殿樣に忠義をするがいゝ、私の事は少しも心配するに及ばぬ』と云ひますので、百姓も安心して直にお母さんに別れ、一人淋しく山を降りて參りました。

すると先刻登つて來た路には、一々木の枝が棄てゝ有つて、夫れを目的にして行くと、少しも道を迷はないで、何の譯もなく家へ歸ることが出來ましたから、百姓はこゝて初めて氣が付き『アゝ先刻お母さんが、途中で木の枝を折つて捨てゝ行つたのは、私が一人で歸る時に道に迷はない用心であつたか』と、思つてみると、如何にも其の心が有り難く、なんぼ殿樣のお命令でも、こんな有り難いお母さんを山へ捨てゝ成るものか』と、もう胸が一ぱいに成つて堪らなくなりましたから、直ぐと又其足て山へ行き『お母さん！どうぞ勘忍して下さい私が惡う御座いま

した、さア家へ歸りませう、私は屹度お世話を致しますから』と百姓は前の樣のお母さんを負つて急いで家へ歸つたのです。

けれども萬一此の事が殿樣に知れ樣ものなら、直ぐに捕つて殺されますから、其後はお母さんを人に知れない穴藏の中に入れ、三度の食事やら其他の世話迄して、相變らず孝行して居りましたが、いゝ都合に此の事は誰も知る者が有りませんでした。

其後曾くたつと、例の殿樣は、國中の百姓の智惠を試して見やうと思つて、又難しいお布令を出しました、其お布令と云ふのは、灰で作つた繩と、本末のない材木とを早速獻上せよと云ふのであります。

灰と云ふものは細かな粉でせう、どうして繩が作られるものですか、木にはどんな木にでも本と末とが有ります、之れは二つ共誠に難しい事ですから、國中の百姓共は、此のお布令には困り果て、方々で集會を致し、どうしたらば出來るだらうと、互に首を傾けて相談して居りました。

所が例の百姓も、又此の仲間て御座いましたが、どうしてもよい智慧が出ません

ので、何でも之れはお母さんに相談して見やうと、穴藏の中のお母さんの所へ行つて、此の事を話しますと、お母さんは『オヽそんな事は何でもない事だ、先づ普通の繩をやけば、みんな灰になつて仕舞ふだらう、けれども繩の形は矢張り殘つて居るから、灰で作つた繩も同じことだ、又本末の無い材木を造るには、どんな木でも構はないから、先づ末の方を十分に叩いて、夫れを暫く水に漬けて置いて御覽、さうすると其所が膨れて來て、水に浮かべて見ても少しも傾がない、つまり本も末もないのにならう、灰の繩だの本末のない材木だのと云ふものは、この廣い日本中を尋ねて歩いた所で、元より見付かる筈の物ぢやない、そんな事は殿樣だつて、ちやんと御承知の筈だが、みんながどんなお答をするだらうかと、お前達の智慧をお試しになるのだ』とすつかり譯を聞かされて、百姓はもう大喜び、直ぐと此の事を仲間の者にも話して、早速二つの品を拵へ、之れを殿樣に献上致しました。すると殿樣は、大層感心して、直樣其百姓をお呼出しになり、譯をお尋ねになりますと、之れには大きに困りましたが、元より正直一途の男ですからどうも嘘を云ふことは出來ませんで、仕方なしに『ハイ夫れは、母に教はりました』と、度胸を定め

て云ひますと、殿樣は驚いて『何！母に教はつた其方の母はもう此間殺した筈ぢやないか』とのお尋ねに、百姓は大きに困り、一度山へ捨てた事、又山から連れて來て、穴藏に隱して置いた事など、一々詳しく申し上げますと、殿樣はお腹立かと思ひの外『さては年寄の母が教へたのか、して見ると年寄と云ふものは、智慧の有るものだ、夫れを只汚ないからと云つて、殺させ樣としたのは、全く己が惡かつた、遠慮にや及ばぬ、大切にして養ふがいゝ』と、殿樣は大層年寄をお褒めの上、以前の嚴しいお布令をば、一切お止めになりましたから、此の百姓を始め、國中の者共は大喜び、之れも全く此の男が親孝行のお蔭だと、有難がつて居たのです。

其後は此の百姓も最早や殿樣のお容しが出ましたから、誰にも遠慮せず、早速お母さんを穴藏から取出して、大切に養つて居りましたが、其中にお母さんは年が寄つて、とうとう死んで仕舞ひました。

根が親孝行の百姓は、たつた一人のお母さんに死なれて悲しくて堪まりませんから、毎日泣いてばかり居りました、すると或晩の事、百姓は只一人、縁側に座つたまゝ彼方のお山を眺めて居りますと、折から十五夜のお月樣が、其山の上へお昇

りになもました。

百姓は之れを見るにつけても、お母さんのことを思ひ出し『アヽ丁度あの山へお母さんを捨てに行つたのも今夜の様な月の晩だつた、今はもう捨てやうと思つたつて、お母さんは居やしない、こんな事に成るならば、山へ捨てたり、穴藏へ入れたり、あんな酷い事をしないで、もつと孝行をすればよかつた』と、過ぎ去つた事を思ひ出すと、又悲しくて堪まりませんので、オイ〳〵聲を上げて泣いて居ますと、不意に其耳の側で『もし〳〵、貴方は何をそんなにお泣き遊ばすのです、これからは私が側に居ますから、もうお泣きなさいますな』と、優しい聲で云ふものが有るので、百姓は驚いて見ると、ツイ見た事のない美しい女が居ますので『お前さんは誰ですか』と、尋ねますと、女は『ハイ私はお月樣の所に居る天人ですが、今夜からは貴方のお嫁に來たのです』『エッお月樣の所からお嫁に來た、そんな馬鹿な事があるか』『イヽエ本當です、お月樣は貴方の親孝行を感心なすつて、私に早くお嫁に行つて慰めてやる樣にと仰しやいましたから急いで參つたのです、死んだお母さんはもう蘇生る譯でも御座いませんから、今日からは氣を取り直して仕事

に精を出して下さい、夫れが何よりの親孝行ですから』と云ひますので、百姓も氣元を直し、夫れから此の女をお嫁さんにして、一生懸命仕事に精を出し、女も亭主を助けて働きましたから、家は次第に豊かに成りました。

すると間もなく例の殿樣は隣國と戰をお始になる爲に急にお城を拵へなければ成らぬことゝなり、又百姓へお布令が出て、二三日の間に、大きなお城を造り上げろとの事です、普通の家だとて、二日や三日に出來るものでは有りませんのに、まして大きなお城を二三日の間に拵へると云ふことは、迚も出來ない相談ですから、百姓共は又も集合をして、頻りに心配して居りました。

すると例の百姓のお嫁さんは、此の事をきゝまして『夫れは何の造作もない事ですから、御安心なさい』と、やがて懐の中から、小さな箱を取り出して、おまじないを云ひながら、さつと、其蓋を取りますと、不思議や其中からは、大工や左官が十人百人、千人萬人、遂には數の知れない程大勢出て參りまして、忽ちお城の普請に取りかゝりましたから瞬く間に雲突く樣な大きな城が出來上り、夫れが濟むと例の大工や左官は、再び元の小箱の中へ入つて仕舞ひました。

其處で殿樣は悠々と此のお城の中へ入り戰爭をなさいましたが、お城は眞に固く出來て居ましたので、一度も敗ける樣なことはなく見事に敵を追拂つて、大勝利と相成りました、之れと云ふのも皆あの百姓が孝行の德だと云ふので、早速御殿へお呼び出しに成り數多の御褒美を下れましたので、百姓の家はいよ〳〵金持になり遂には日本一の大福長者と成りましたとさ。

(八) 養老の瀧

前のお話は信濃の國のお話でしたが、之れは又美濃の國のお話です、美濃の國の大垣と云う所から少し離れた所に養老の瀧と云ふ大きな瀧が有りますが、之れもズツト昔には、未だかう云ふ名が御座いませんでした。

所が今から凡そ千年程も前に、其瀧の傍に、一人の樵夫が住んで居ましたが、之れが眞に親孝行な男で、たつた一人の年とつたお父さんを大切に養つて居りました、此のお父さんと云ふのは、三度の御飯よりもお酒が好きですから、孝行者の樵夫は、どうかして思ふまゝお父さんにお酒を上げ度いと思ひましたが、元より家

は貧乏で、お米やお藥も碌々買へない樣な暮しですから、中々お酒を買ふことは出來ないのです。

併し何でも無いと成ると猶の事欲しい樣な氣がするのが人情です、でお父さんは毎日の樣に『アヽ酒が飲み度いなア、酒が飲めない位なら己は死んだ方がいゝ』と情ない事を云ひますので、息子は『お父さんそんな事を云うもんぢや有りませんん、私が今に買つて來て上げるからとは云うものゝ、迚も酒を買ふ樣なお足はありません、何でも之れは一生懸命に稼いでお足を儲けなけりやならぬ、さうすればお父さんのお好きな酒を、思ふまゝ買ふことが出來ると、夫れからと云ふものは、樵夫は朝も早く起きて、一生懸命に働いて居りました。

酒はどこから出て來たか

或日の事例の通り、山へ行つて働いて居ましたが、あんまり働いた爲咽が乾いてたまりませんので、水を飲まうと思つて、谷底へ下り樣とする拍子に、石に躓いて轉びました、すると不思議ぢやありませんか、其石の間から急に水が流れ出して、何だかプンと酒の香が致します。

『オヤこれは變だ』と思ひまして、グッと一口飲みますと香ばかりではなく、其味ま

でが全くのお酒で、而も非常に甘いので『さては本當のお酒か』と、樵夫はもう大喜び、早くお父さんに飲ませて上げ度いと思ひましたが、相憎く器が御座いませんから、餘儀なくお行厨の箱の中へ一ぱい入れて、其まゝ急いで家へ歸りました。

『お父さん〳〵、今日は大層いゝ酒を取つて參りました、さア早く之れをお飲みなさいまし』と云つて出しますと、お父さんも喜んで『何、酒だ……夫れは有難い』と、早速一口グッと飲み『イヤ之れは至極よい酒だ、こんな結構なのを全體お前は何處から持つて來た』ときゝますと、樵夫は地から涌いて出た事を殘らず話して聞かせますと、お父さんは驚いて『夫れは如何にも不思議だ、だが地から涌くものならば己の樣な貧乏人には有り難いことだ、アヽさう思へば猶更甘い〳〵』と、頻りに舌皷を打つて嬉しがつて居ます、之を見て樵夫は猶の事嬉しがり、夫れからは毎日大きな瓢箪を持つて行つて酒を取り、お父さんに飲ませて居りました所が不思議ぢやありませんか、今迄は年を取つて體も碌々に動けなかつたお父さんが、此のお酒を飲み初めてから、段々丈夫になりまして、而も顏さへ若やいで來ましたが、之れもお酒の功能だと、父子二人は喜んで居りました。

すると此の事が忽ち大評判に成りまして、時の天子樣の元正天皇の御耳に入り『さう云ふ不思議な酒ならば、一つ行つて見やう』と仰せられて、わざ〳〵美濃國へ行幸あらせられますと、成る程噂に違はぬ酒が涌いて居るので、大層御感心遊ばし、之れも全く孝行者の樵夫の德だ、定めし天下も泰平に治まるだらうと、直に御勅使を樵夫の家へお遣しになり、いろ〳〵の御褒美を下されまして、其上此の樵夫をば國司と云うて今の知事の樣な役目になさいました。

夫れから天子樣は、老人を養つたと云ふ所から、瀧の名を養老とお付けになり、恐れ多くも年號まで養老とお改めになりましたとさ。

教訓お伽噺

(一) 蛙手池

上

まづ或る處に、大きな古池が一つ御座いましたが丁度夏になりますると、この池の中から、澤山な青い蛙が出て來ましてギヤア〳〵と頻りに騷ぎ立てます。こ

ゝに又この池の畔には、一本の大木が御座いましたが、青い蛙が池の中から飛び出して、ピヨン〳〵と大木の枝に飛び付きますと、夫れが丁度楓の葉の樣に見へて、まことに奇麗ですが殊にキヤツ〳〵と鳴く處は、又まことに物凄い程で、夜は誰も池の近所へ行くものが有りませんでした。

太郎はこの事をきゝまして、どうもそんな筈はない、と云うので、或る晩たゞ一人て例の池の傍へ出掛けて參りました。

夜はシン〳〵として池の面には油の樣な水が一ぱいになつて居ります、太郎は之を見て、

《太》こんな汚ない池から蛙が出て來て化けるなどゝ云うことがあるもんか、詰らないことを云ひふらしたものだなア』と暫らく眺めて居りますと、不思議や油に似た水の面が、この時急に渦を巻いて、忽ち現れて來ましたのは、見上げる程の大きな青蛙で、夫れが火の樣な舌を出して浮いて出ました。

太郎は之を見て、一時はギヨッとしましたが、元より氣の強い子ですから、突然その蛙に向つて。

《太》何と云ふ大きな蛙だらう、驚いたなア不意にこんな奴に出られちや』と云ひますと、蛙はその體の大きいのに似ず、さも馴々しい口振で、《蛙》坊ちやん！驚くには及びません實は貴君に少々御願ひしたいことが御座いますが、どうか御きゝ届け下さるまいか』と、云ひますので太郎はこゝぞと。

《太》頼みとは何の事だ、一體貴様の様な大蛙はツイに見たこともないが、多分魔物ぢやあるまいか殊に近頃世間の噂をきいて見ると、この池から毎晩數の知れない小蛙が出て、木の枝に丸で木の葉の様につくと云う話だが』と、皆まで言はせず、蛙は之を遮つて、《蛙》眞にさうで御座います夫れもみんな私の仕業で御座いましたが、坊ちやん、夫れに就いては深い譯が有りますので、一應夫れをお聞きとり下さいまし』との事に太郎は合點しまして、《太》よし〳〵！さア遠慮なく話して見ろ』《蛙》有り難う御座います、夫れでは申しますが實は私も根からの蛙ではないので、以前はこの池の畔に生へて居た楓の木の葉で御座います』と言ひながら、眼をパチ〳〵させて涙をふき乍ら、《蛙》その楓の葉が、どうしてこんな蛙になりましたかと申しますと、丁度去年のことで御座います、この池の

底から一疋の大きな土龍が、出て参りまして、私共の根の處をみんな食つてしまひましたから、たまりません、流石に大きな楓もドシーンと倒れて、そのまゝ池の中に落ちてしまひましたが、夫れからその葉がみんな蛙に化けたので御座います』《太》フーン、そうか夫れぢやお前は矢張その蛙の大將なのか？』《蛙》左様で御座います、別段大將と云ふ譯でも御座いませんが、私は幹の處のお化ですから夫れで少し體が大きいので御座います』《太》なる程解た〳〵、よし〳〵夫れでお前の願とは一體どんな用事ぢや』《蛙》その事で御座いますが實は今でも時々あの土龍が出て参りまして、時々この池の中を荒れ廻りますので、御覽の通りの水は油の様で、棲む魚もみんな死んで仕舞ひました、もし何時でもこのまゝにして置こうものなら、土龍は段々増長してどんな謀反を企むかもしれません』《太》フーンなる程〳〵、どうも僕もこの池の水が油の様にドロ〳〵して居るのは、不思議だと思つたが、よし〳〵僕が今に其土龍を退治てやるから、マア安心しろ！』と、太郎はさも容易く引き受けますと、蛙は又眉をひそめて、《蛙》坊ちやん〳〵そんなに易々とお引き受けなさいましても、土龍は大きな奴で、こう〳〵をへたもの

ですから水ても火ても思ふまゝに吹きかけますもの失禮ながら御用心をなさいませんでは、お體が危なう御座います』と、心配さうに云ひますけれども、太郎は高が土龍の一疋位、元より何とも思ひません、が、念の爲めに蛙に向つて、《太》何だと、その土龍は火ても水ても、思ふまゝに吸き散らすと云うのか』《蛙》左樣で御座います、何にしろ、數千年のこうをへた丈に、毛は宛然銅の針を植えた樣で、口から吐く毒氣は池の水を濁らせ、手の爪は大木の根を引き倒すので、その勢の物凄さ、とても赤手では叶ひません！』《太》何に心配しないでもよい、今に僕が立派に退治て見せるぞ』《蛙》どうも有り難う御座います』

と、蛙は太郎の言葉をきいて、さも安心したかの樣にやがて其まゝドロ〳〵の池の水の中へ、ドブーンと音さして飛びこみますと、アゝラ不思議やその蛙は、丁度布設水雷にでもかゝつた如く、體が散々に碎けて青色の水玉が高く空に打ち上げられますると夫れが又みんな小さな蛙になつて、ギャッギャ〳〵と、耳も破れる程騒ぎ出しました。

(二) 土龍塚

下

これを見た太郎は、さては噂にきいてた事も本當だなと、暫く默つて窺つて居りますと、急に大木の根元から、忽ちバッと青い火が燃へ上つたかと思ふと、見るも恐ろしい大きな土龍が一疋、爪を磨き牙を鳴らして、ムク〳〵這ひ出しながら、《土》やア〳〵木葉蛙共、又しても執念深くつき纏ふか、今に見ろ、己がこの舌に吸ひ取つて仕舞つてやるぞ』と、火の樣な舌を振り廻して、小蛙共を片ッ端から、みんな吸ひ取つて仕舞ひ、そのまゝ又ムク〳〵と大木の根元へ這入つて行きました。後には蛙のなく音もせず、池の面も靜まり返つて、淋しさの程もなか〳〵て有りません、太郎は今目の前に、こんな恐ろしいことを見て、ぞつと身ぶるひをして居りますと、池の水底から面白い節の唱歌が聞こえ出しました。

お天と樣の目を盜み、
茂れる草木も棲魚も、
お池の水を濁らせて、
寄るべ渚の捨小舟、

悪は茲に年を經た。　土龍の杜業ぞ恨めしや、
誰か吾等を哀れみて、　お池の水を澄しめよ。

と謠ふ其聲の細くて哀れなのには、太郎も彌々心細く思ひましたが、只このまゝ歸つて仕舞つては、折角蛙に約束したことを忘れた樣にもなりますから。《太》誰だらう、こんな弱い歌を謠ふものは？』

と、池の底に尋ねますと忽ち波がハタ〳〵と動き出して、《目》誰でも御座いませんか私は目高で御座います私も永年このお池に棲んで居りますが、近頃は土龍の爲めに散々荒らされて、今にどんなみじめに逢ふかしれないです、夫れを思ふと一日もこんな劍呑な處には居られません』と、聲を慄はせて居ますから、太郎はわざと力味返つて、《太》何ッ！心配はない今に其土龍を退治てやるから妄心して居よ』と、慰めますと、目高は其儘又沈んでしまひました。

太郎は暫らく腕を組んで考へて居ましたが今目高の歌をきけばお天と樣の目を盜むと云うことがあつたして見ればお天と樣を一ばん怖がつて居るに違ひない、よし〳〵いゝ事があると、太郎は何か考へたらしく忽ち其あたりから枯葉

や枯枝を多く集せて來て、一時にドッと火をかけますと急に明るくなりまして丸で晝の樣に見へました。

暫らくかつかと燃えて居た火は、又忽ち消へて仕舞ひますると、かの大木の根本からは、再び以前の土龍が出て來て、《土》アヽ今日は早く日が暮れて有難い有難い』

と、不圖首を擡げて太郎を見付け、《土》今夜は又不思議な御馳走があるぞ、雜魚や蛙ばかり食て居る口には久しぶりで舌打が出來るワイ、』

と、カラ〳〵笑ふ口から火を吐く樣に舌を出して居る其面の憎さに、太郎は最早や死を決して、《太》何だッ！貴樣獸の分際としてよくも廣言を吐きくさるな永年こゝに巢をかまへて草木を枯らし魚介を殺す、その罪ゆるしてなるものかさア尋常に誅に伏せよ』と、太郎は傍にあつた大石を拾つて土龍の腹を目的としてドシーンと一つ喰はせますとブツリと音して腹が破れますと、不思議や中からは以前の青蛙がキャッ〳〵キャッ〳〵と騷ぎ出し、何れも喜んで太郎の手足に取りすがりました、之に引き換へて土龍は、太腹を破られまして、もう動くこ

とも出來ませんから、只手足を藻掻いて居りますると、やがて次第に夜が明け離れ東の空から美くしい旭の光が、パッとさし初めますと、土龍は其まゝグーの音も出さず只體をブル〳〵ッと慄はせたが最後息を切つてしまひました。

太郎は目出度く土龍を退治ましたから、蛙共に言ひつけて大勢で之を運ばせます、蛙共は鬼の首でも獲つた樣に、先づ水草の葉で車をつくり、夫れに土龍の體をやつとこさ積み載せて、エンヤ〳〵と引き出しました。凱旋の旗の代りには、蒲や河骨の花を押し立て、勇ましい軍歌を謠ひながら、大きな池をグル〳〵引き廻して居りますと、やがて又た池の中からは、目高が大勢出て來まして、《目の一》久しぶりで今日は日本晴だなア』《目の二》さうだ丸で油の樣だつた水が今日は不思議に水晶の樣になつたなア』《目の三》之もみんな太郎樣のおかげだ、明日からは之で己等も澄んだ水の中で、安氣に暮らされる』

と、いづれも土龍の退治されたのを喜んで居りました、やがて太郎は蛙共に言付けて、あの大木の根元に穴を堀り、其の中に土龍を埋めますと、その枯木は元の樣に、青々と茂り合つた槻の木となり、又池の岸には、多くの水草が生へ、魚や蛙も樂

しんで暮らすことゝなり又土龍の墓には、立派な石碑をたてゝやりましたとさ。めでたし〳〵。

(三) 木笠草笠

上

ことしも秋の初めになつて、田圃の稻も穗を抽き出し、野にも畑にも小鳥の餌物が、大分澤山出來ましたので、方々の百姓家では、藥の人形に古い破れ笠を被せ、夫れを田圃の處々に立てゝ、鳥の來ない用心にします。

こゝに或る田圃の中に、二個の藥人形が同じ樣な格好をして同じ笠を被りながら、目をむき立てゝ小鳥の番をして居りましたが、あるとき二個は互に顏見合せて、《甲》オゝ其處にも僕の兄弟分が居るな』《乙》ア、僕によく似た奴だ、何處からまアいつの間に來たんだしら』

と、首を傾げて二個とも、同じ樣にしばらく思案して居りましたが、やがて一個が《甲》ヤア君の被つてる笠は草の笠だな』と、さも氣の付いた樣に目を丸くします

と、一方も亦、《乙》ウン、さう云う君の被つてるのは木笠だなア』《甲》さうだ僕は木笠太郎と名も高い藁人形だが、さう云う君は名を何と云う』《乙》僕は草笠二郎と云うものだ今日から後は君と兄弟になり、木を兄とすれば草は當然弟の身、折角可愛がつて呉れ給へ』《甲》それは殊勝の心掛ぢやな、及ばず乍ら木笠太郎今より草笠を弟として、この痛腕で小鳥共を散々追ひ拂つてやらうかね』と、こゝで二個は相談を致しまして、木笠太郎と草笠二郎とは、本當に兄弟の約束をして、しばらく仲よく暮らして、何の不平も御座いませんでしたが、やがて秋も半となり、田圃の稻が黄色になりますると急に小鳥共が大勢集つて來て、《小鳥の一》どうだ甘いぜ、三日見ぬ間にこんなに色付いて仕舞つたよ』《小鳥の二》だから待てば甘露の日和とさへ云うぢやないか』

《小鳥の三》稻の穗のまだ青い頃には、立つ案山子さへ力味て居たが』《小鳥の四》矢張り俺が來て見れば、顔の色は稻と反比例でだん〳〵青くなるばかりだ』《小鳥の五》秋になつて青くなるつて六な奴ぢやあるまい、ドシ〳〵突貫しやうぜ』《小鳥の六》ウン突貫せよ〳〵、案山子の彌郎を突き倒して、散々稻を食ひ荒せ』と、小鳥は大勢聲を揃へて、今丁度首を垂れて實つたばかりの田圃へ、丸で木の葉の散る樣に、バラバラと飛んで來て、手あたり次第にツイ〳〵と、最早や稻の穗を食ひかけました。

今迄手に汗を握り、寄らば打たうと身構へて居た二兄弟は、この有樣に吃驚して しばらくは茫然と顔見合せ、どうすることも出來ませんでしたが、やがて又思ひ出した樣に、兄の太郎は齒を食ひしばり、《太》何と、弟の草笠次郎、永い間田圃の中で、雨が降らうが風が吹かうが、只眞直に立つたまゝで、足には大分痺が切れた之では鳥を追ふことも出來まいなア』と、嘆息致しますと、弟も又同じやうに《次》さうだ、一夏すぎて秋も半元の體をたづねても、どうせ廢物の簑や笠から出來た物だもの、骨が曲るのも肉が落ちるのも、何の不思議があるものか、之で小鳥を追へなどゝは、本當に氣の知れない話ぢやよ』と、負惜しみやら不平やら云うて居りますと、其内に小鳥は次第に數が多くなり、穗をつんで逃げて行くものもあれば、一つ〳〵米粒を拾つて食べるものもあり、二日三日と過ぎる内には、もう案山子を馬鹿にしてその笠の上に止まつて、其處で米粒を食べながら、角方を取つたり、

鬼どつこをしたり傍若無人の振舞を致しましたが、二人は只黙つて見て居るばかりで、如何することも出來ませんでした。

話代つて此處に此田圃の百姓が今年は定めし實入が多いだらうと樂しみながら、やつて來て見ますると、南無三寶折角案山子をたて、置いたのに、稻はみんな小鳥に食ひ荒らされて、滿足に穗を垂れて居るものは、一株も見へないと云う仕末です。之を見て百姓は、がつかり致しましたが、罪はみんな案山子が惰けた譯だと云うので、彼の木笠太郎と草笠次郎との二人をば足本から引き拔いて、そのまゝ田圃の中に倒して置きました。

二人は身から出た錆でどう云う云譯も出來ませんので、只音無しく倒れたまゝ、やつぱり默つて目をつぶつて寢て居りました。

すると或晩のこと、空が急に曇つて仕舞ひまして豆の樣な大粒な雨が、ボツリポツリ降つて來て間もなく、ザア〳〵と大降になつて來たのです。

今迄は夫程迄に思はなかつた雨が急に身にしみて最早や堪えることが出來ませんので、兄の太郎は、涙ながらに、《太》どうだい草笠だまらないぢや無いか、どこか遁げて行く處は有るまいか』《次》さうだなア何處へ行かうたつて片破の人間だから、誰も雇つて呉れ手がなからうぜ』と、今度は二人ともしよげて、ヲイ〳〵泣き出しましたが、雨は次第に大降りになり、どうすることも出來ませんので半破れになつた木笠草笠を兩手で抱えながら、足に任せて逃げ出しました。

(四) 坊主山

下

いかに笠があつても、あんまり雨が大粒なものですから、とう〳〵破れて仕舞つて、二人は最早や堪らなくなり。

《草》オイ〳〵兄貴、もうかうなつちや仕末に負へない、早くどうか仕やうぢやないか』と草笠次郎がこぼしますと兄の木笠も同じやうにッて仕樣があるもんかい、こんな夜中に雨は降るし、だゞかうして居たら今に土左衞門にでもなつちや堪らないから行かれる處まで走らうぜ』と二人は又候眞暗闇の中を、夢中になつて走つて居る內夜は次第に明けはなれ

て、雨も又晴れましたから、二人はやつと一息つき、《草》ヤア兄貴、無事だつたか、昨夜は酷い目に逢つたなア』《木》オ、弟まア命があつて結構々々、こんな處に居ちや、又どんな目に合ふか知れない、さア早く高飛をしなくちやならんぞ』と雨が晴れたを幸に、二人は力のつゞく限り、彼方のお山へ一散走り、丁度お山の頂邊にまで登り着た頃には、二人共息が切れ〳〵になつてしまひました。

《木》アヽ苦しい〳〵、命が無くなりさうだなア』《草》ウン、之と云うも身から出た錆だ、我慢しろ我慢しろ』

と、二人は又もや勝手なことを云うて、山の頂邊に茫然立つて居ますと、やがて下の方から、ワイ〳〵騒いで來るものがあります。

二人は之をきいて吃驚しました敗けた兵士は、芒の穗も、敵の旗かと思ふも同樣で、太郎と次郎は、どんな追手が向つたことかと、身を慄はせて小さくなつて居りますると、追手と思ふたのは、小さな木菌て、何れも同じ樣な黃色な笠を被つて、ワイ〳〵云つて上つて來ます。

さては木菌共の仕業か、夫れぢや先づ安心したと、二人はやつと胸なで下し、さて

樣子をきいて見ますると、こゝのお山はその名を坊主山と云うので、丁度秋の最中になりますると、山一面に木菌が生へ、夫れが丁度雲水坊主が笠を被つて列行する樣に見えます。

さて坊主山の木菌共は、先づ太郎次郎の前に來て、ズラリと一列にならびながら、《菌》太郎次郎の御兩人樣に申し上げます私共は年來この坊主山に生へました木菌で御座いますが、この山に時々烏が飛んで參り坊主山の土を堀り、夫れがために木菌が生えなくなつて仕舞ひますから、どうぞお二人て坊主山の番人をして下さいませんか』と頼みますと、木笠と草笠とは暫らく首を傾げて考へて居ましたが、《木》ウン！夫りやア安い御用ぢや、實は私も弟の草笠と二人で、之迄田圃の番人をして居たがどうもあんまり氣がきかない話だから、こッそり拔け出して來たのだよ』《草》本當に兄貴の云う通り、田圃の番なぞするよりも、坊主山の頂邊て木菌の番をした方がどんなに氣樂だか知れやしない』と、二人は譯もなく木菌の云う事をきいてやりますと木菌共は嬉しがつて、又列をつくり、ゾロゾロと山の麓の方へ下りて行きました。

後には木笠太郎と草笠次郎ばかりです。《木》どうだい草笠、秋の山の景色は又格別ぢやないか、見渡すかぎり廣々として、田圃にや稻が穗を垂れて、』《草》畑には蕎麥の花もさき、』《木》雪と積つたよい景色』《草》里には囃す笛太鼓』

《木》豐年祭もおもしろい』と、二人はお山の頂邊で、散々浮かれて居りましたがその内に大分疲れたものと見へまして、無精者の常とて、又ゴロ〳〵と寢入つて仕舞ひました。

話代つてこゝに又、この近所の山奥に、勘三郎と云う烏が棲んで居りましたが、いつもこの坊主山に來て、土を堀り石を起しなどして、木の根の下に棲んで居る虫を捕つて、食べて居りました。

或日の事です、今日も又坊主山へやつて行かうとしますと、山の頂邊に大きな坊主がしかも二人揃つて、威張つて、居りますから、さては何時の間にか、あんな大きな彌郎が番人に來たかと、勘三郎もこの日は二の足を踏んで、スゴ〳〵と元の舊巣へ歸つてしまひました。其翌日になりまして、再びやつて參りますと、今日は昨日の大坊主が、二人揃つて倒れて居りますから、こいつ朝寢して居るのでもあ

るまいと思ひ、大膽にも直その傍まで行つて見ますと、これは又見覺えのある、例の無精ものゝ二人ですから、こりや田圃に居堪まらず、雀に追はれてこんな處まで遁げて來たのかと、頭から馬鹿にしてかゝり、よく〳〵其正體を改めて見ますと、頭の笠は破れ、着て居る簑は切れ〳〵となり、蠅や虻が大勢よつて來て、止まつたり騷だりして居りますから、烏は大勢の群になつてやつて來ましたが、草笠木笠は根が體が腐つて居りますから、迚も烏を追ひやる事は出來ず、只默つて見て居りますと、烏共は平氣で其頭に止まり、例の丈夫な口嘴で、コツ〳〵と叩きながら、とう〳〵笠を破り、簑を裂いて、骨ばかりにして置いて、そのまゝ又山の奥へ引き上げてしまひましたとさ。めでたし〳〵。

(五) 僞ミイラ

上

さも青々と茂つて居た山の木の葉も、近頃は毎朝霜が降りますので、みんな黄色くなつて仕舞ひ風が吹けば一度に皆散り〳〵になりさうです。

こゝに或山の木の洞に、一疋の甲蟲が今年の夏の頃から棲んで居りまして、晝は青葉の蔭に露を吸ひ、夜は洞に夢を結び何不自由なく暮らして居りましたが、月日の經つのは止める事も出來ず、秋風が吹き初めた頃からは、毎日洞にばかり籠つて、只ウツ〳〵と日を暮らして居りました。

或日のこと此甲蟲は、日の暖かさに浮かれて、例の洞を出ながら、弱り果てた足を踏みしめ〳〵、外の景色を眺めまして、《甲》オヽ暫らく見なかつた内に大分世間の樣子が違つた樣だ青葉のかげに朝日がさして、露の白玉が光る夏の朝、思へば夫れも夢となつて、今日の秋風の物悲しさは』と、甲蟲は痩せ腕を撫でながら、むかしなつかしがつて居りまするとと急に自分の頭の上で、ミシリ〳〵と音がしますから、甲蟲は頭を上げて之を見ますと、見覺えのある大きな蠋です。

蠋は甲蟲の門前を通り過ぎやうとして、《蠋》これは甲蟲さん！　いつまでも御達者でお目出度う御座います』愛想に聲をかけますと甲蟲も知り合の中とて、《甲》ウン誰かと思へば蠋さんか、この寒空を控へて何處へ旅をするのだ？　と尋ねますと蠋は頭を縮めて、《蠋》イヤどうも誠にお恥づかしう御座います、夏

中寢てばかり暮らしたものですから今日となつても別段之と云う分別も立ませんので……』と、縮めた頭をコソ〳〵掻いて居りまするとと、甲蟲は重ねて、《甲》分別も立たないと云つたつて、常から考深い君だから何か又工夫をしたのだらう、エツ蠋さん！』

と、急所をつかまれて、蠋も、其まゝ行き過ぎることは出來ませんから、《蠋》ぢやア甲蟲さん、恥かしながら聞いて下さいまし、秋になりましてお互樣に、どうも心細うなりました貴方樣はまだ立派な甲良が御座いますが私共は弱い皮一重で、朝晩の風も強く身にしみますがうなつてはウカ〳〵と木の葉の上に止まつて居ることも出來ませんから夫れで之れから土の中に入つてミイラにならうとしまして實は只今こゝまで這ひ出して參りました』《甲》何！　ミイラに成ると云うのか、そいつは面白いことを考えたものだ、一體夫れになるにはどう云う工夫をするのだね』と、甲蟲はさも羨ましさうに尋ねますと蠋は、《蠋》いや工夫も何もあつたものぢや御座いません、只土の中で默つて坐つて居れば夫れで間もなくなられます』《甲》ミイラになつたら寒かアないのかね』《蠋》夫りやア貴方も

うミイラになつたものならば寒くもなけりや食物も食べたくない、只死んで居るのです』《甲》死んで仕舞へば詰らないぢやないかね』と、甲蟲は顏を青くします と、蠑は却つて得意になつて、《蠑》なんの死ぬと云つたつて來年の春までです、暖くなりや立派に翅が生へて又樂しく遊ぶことが出來るのです』《甲》フーンさうですか其いつは面白いことを聞いたぢやア僕もならう、ミイラに成つてこの冬中土の中に居やう』

と甲蟲は躍起になりますると、蠑も贊成しまして、《蠑》甲蟲さん本當によい處へ氣が付きましたね、流行歌にさへ云う通り、武士の子と云うものは、《甲》ウン、腹がへつてもひもじうない』《蠑》若も飢死した時は』《甲》博物館に飾られて』《蠑》ミイラの見せ物に……』と、二人はしばらく浮かれて居りましたが秋の日足の短かさに、日は早や西の山に落ち、風さへどうやら寒くなりさうですから、蠑は甲蟲の處を出て、一人土の中へ行かうとしますと、甲蟲は之を呼び止めて、《甲》オイ〳〵蠑さん少し待つとくれ、少々お尋ねしたい事があるから』《蠑》ハイ〳〵何で御座いますか！

と、蠑は迷惑さうな顏付をして居ります。

《甲》私も甲蟲と云つて武士の子だから、君と一所にミイラにならうから、少々〳〵待つて居て下さいよ』と哀れな顏をします、蠑は待つて居てはだん〳〵夜になりますから、《蠑》待つてゝ上げたいけれども早く行かなけりやア迷子になるから困ります、私はこの木の下でミイラになつて居ますから、君は明日の朝ゆつくり來たらよいでせう』と、蠑は足に任せて、木の幹を一散走りにして、急いで根元の土の中にもぐり込み、やがて靜かにミイラになるしたくに取りかゝりました。

(六) 身震物語

(下)

さても蠑は、土の中へ這入りまして手を合せ膝を折り敷いて、南無阿彌陀佛々々〳〵々々々と、稱へて居ります內にだん〳〵氣が遠くなり、體が輕くなつたかと思ひますと、上皮が一枚スル〳〵と、頭の方から脫げ出して、夜明方には美しい丸坊主の蛹になり、最早や食ふことも、歩くことも出來ない代り、土の中のことですか

ら、元よりいつ夜が明けたのやら、日が暮れたのやら、少しも解りませんから、只夢ばかり見て居るので、蠏には又之が一ばんの樂しみであります。

こゝに又洞の甲蟲は、ミイラになつて冬が凌ぎたさに、蠏の跡を追ふて、方々尋ねて廻つて居りましたが、どうしても其行方が分りません。其内に日はたつぷりと暮れて仕舞ひましたから、殊更夜は外へ出た事のない甲蟲は、最う途方に暮れて、茫然して居ましたが、この節の時候は、晝こそ温かくも御座いますが、お天と樣がお入りの後は、風ばかり寒く吹いて來て、迚も辛抱の出來ない寒さです。

甲蟲は、よろめく足を踏みしめながら、一足歩いては休み、二足行つては立ち止まう、ブル〳〵慄ひながら夫れでも默つて居ては、蠏の居所も解りませんから、

《甲》イーモイーモ蠏やい！　イーモのお宿は何處にある、

土の中か木の中か。　ミイラか蟲か返事しろ。

イーモイーモ蠏やい！と、謠ふ其聲さへ絶々に、慄つて居りましたが、一向返事の聲も聞こえず、只甲蟲の聲ばかりが、木靈に響いてワイ〳〵と聞こえるばかりて御座います

其内に不意に甲蟲の顔に、大きな手が來てひやりと當りました。甲蟲は今迄一心に探して居た蠏が、わざ〳〵自分を迎ひに來て呉れたことと思ひ、急いで其手を握つて、《甲》蠏さんか？と尋ねますると、只何とも返事をしないて、ソーッとその手を引いて、《‥》ウッフ、、、、、フッ！と笑ひます。

暗の中てこんな怪しからぬ聲がしますので甲蟲は一寸怖氣づいて、《甲》氣味の悪い笑ひ樣をする者だな、この暗の夜に誰の惡戯だらう』すると其笑ひ聲は、《‥》誰てもない己は身慄と云う者だ、身慄にとり付かれると體がガタ〳〵振つて死んで仕舞ふぞ』《甲》何ッ！　身慄と云う者だ、そんな奴に取り付かれて堪るものか』と、甲蟲は手を振り切つて逃げ樣としますと、今度は又細く痺せて針の樣な痛い骨ばかりの手がヒラヒラと飛んで來て、サッと顔を撫てました。

《甲》アッ痛い〳〵！　又何かやつて來たぞ』と、手て以て拂はうとしますと其手が忽ち凍つて覺えがなくなりさうです。

《甲》冷たい！　冷たい彌郎だな！　ブル〳〵〳〵』身慄をしますと、又暗の中から《‥》ヒリ〳〵〳〵ッ！　ピッピッピッ！　と笑ふ聲が、身を切る樣です。

《甲》何だい、いやな聲がして笑やがるな』と甲蟲は冷たさ苦しさに、息も切れ〳〵ながら、猶敗け惜みを云つて居ますと、その笑ひ聲は、《……》知らないか、己は霜だぞ霜に取り付かれると貴樣の體はミイラの樣に凍つて仕舞ふぞ』《甲》何ッ霜だ！　霜に取り付かれるとミイラになられると云うのか』《霜》さうよ、怖けりや逃げて見ろ、何處まで遁げたつて逃がしはせぬぞ、ヒリヒリのヒッピッピ』《甲》霜さん！　己はミイラになるのが心願だから、遁げよと言はれたつて遁げはしないぞ、さア早く取り付いて呉れ』《霜》よし、さア取り付くぞ、寒いたつて我慢しろ、どうせ只て殺して貰ふのだもの少し位痛いのや寒いのは辛棒しろよ』と云はれて、甲蟲は頭を掻き眉をひそめて、《甲》オイオイオイ霜さん、串戯ぢやないぜ、ミイラになるのは頼んだけれど、殺して呉れろとは云はないのだよ、しつかり頼むぜオイ霜さん！』と、さも的の違つた樣に云ひますと、霜はすました貌をして、《霜》愚圖々々云うな霜夜の虫とは貴樣の事だ、馬鹿め！　キリ〳〵定佛して仕舞へ、ビーリビーリのビリビリビリ痛いかッ！　さアモー少しだ、ビーリビーリのビリビリ』と、霜の粉を撒き散らしますと、甲蟲の體は忽ち固くなつて、眞白に凍つて仕舞ひました。

《甲》ウーン痛いわい〳〵、こんな事なら、ウツ洞の中に居るのであつた痛アい痛アい』と、暫らく泣いて居りましたが、やがて其聲も次第に細り、最早やミイラになつたのか、聲も立てなくなつて仕舞ひました。

（250）

（七）蠑螈ヨロ〳〵

時は春の末のことで、日は若葉を照らして、早やも麥藁帽子の出さうな頃、或日一疋の蠑螈は、今迄冬籠をして居ましたが、大分結構な陽氣になりましたので、この若葉の影に來て、しばらく其大きな體を横にして、晝休みをしかけました、一體蠑螈は體ばかり大きくても、根が無性な奴ですから、働いて物を食べる樣な考はなくて、

（251）

寐て居て果報を待つばかりでした。すると彼方の木の蔭で頻りにワイ〳〵騒いで居るのは、數千匹の蟻で、お家の坊ちやんが食い殘して捨てゞもしたのか、小さなビスケットの片破を、一つ見付けて、夫れにみんな集り合つて居るのでした。蝸牛は蟻の食べようとして居る破片を急に欲しく思ひ、その傍に押しよせて蟻を追ひ散らし、自分で夫れを食べて又木の蔭に行て寐て居りました。

蟻は折角ビスケットを蝸牛に横取されて、口惜しく思ひ、いつか此の仇を討つてやらうと、始終考へて居りますと、又蝸牛の方では、まんまと蟻を蹴破つて、ビスケットを占領しましたから、もう一度今度は蟻の穴まで押し寄せてその貯への品を捕つてやらうと、或日又ムク〳〵と起きて、蟻の穴まで來ましたが其穴の口は小さくて、とても中へ入られませんので、仕方なしに默つて又其處に寐て居りました。

蟻は急に穴の中が暗くなりましたから、不思議に思つて入口の處に觸つて見ますと石でも土でもない柔かくて冷たい樣ですから、《蟻一》何だらう？不思議な奴が穴に閉がつたぜ』《蟻二》石にしちや柔かいし』《蟻三》さうかと云て土よりは硬い』《蟻四》イヤ何だか變に臭い樣だ、木の實の腐つたのぢやあるまいか』《蟻

五》此臭みは木の實ぢやない……ア、解つた〳〵、これは蝸牛だ〳〵』と、急に又穴中が騒ぎ立てますと、蝸牛はブウ〳〵小言を云ひながら、《蝸》己がこゝに居て悪ければ、何か食べるものを出せ！〳〵』と云ひますと、蟻共は恨みある、蝸牛のことですから、《蟻》貴樣にやる樣な食物はない早く其處を退かないと酷い目に逢ふぞ』と、蟻は蝸牛に向つて立退を申出ましたが、蝸牛は蟻の體の小さいのを侮りまして、《蝸》何だ！愚圖々々抜かしたとて退くものか茲に居て悪いなら早く食物を出せ』と云つて、どうしても退きません蟻共は皆申し合せて、《蟻》よろしい夫れなら此方でも覺悟がある、貴樣の胴腹に穴を明けて中の肉をみんな食つて仕舞ふのだ』と、云ひましても蝸牛はまだ本當にせず、《蝸》大きな事を吐くな、そんな小さな體をして何にが出來る馬鹿な奴だなア』

とブウ〳〵言つてる間に、蟻は穴の中から蝸牛の腹を目がけて突貫して來ました。しかも其數は百や二百ではありません、穴中の蟻はこゝを先途と死を決して蝸牛に當りましたから、いくら大きな體でも叶ふもんぢやありません右にコロ〳〵左にコロ〳〵と身をもがきましても蟻は少しも力を挫かず、噛んだり刺した

り致します初じめは蝸も威勢よく蟻を跳ね飛ばして居りましたが、次第に力が弱つて來て、《蝸》蟻さん！もう屹度退くから助けて呉れよ先にビスケットを奪つたのも惡かつた、もう乏からは屹度そんな事をしないから、今度丈は宥して呉れないか』と泣いて頼みましても、蟻は承知しません。

《蟻》今更そんな事云つたとて何になるもんか、ビスケットの恨を晴らすは今日だ〳〵』と、蟻は黒山の如くに蝸の體に集り合つて、とうどう乏を殺して仕舞ひました。

蟻は蝸を斃して、一度に萬歳を唱へ、さて穴へ引き擧げやうと思ひましたが、折角目出度く斃したものですから、その軀を繩で結ひ付けて、穴中の蟻が聲を揃へて謡ひながら、お庭の中を一日中引つ張り廻しましたとさ。めでたし〳〵。

(八) 蟬の雌子

せみさん！　早く起きないか、もう丁度いゝ頃だよ青葉は茂り日も熱い、己等なんざァこんな丈夫な衣服を着て、毎日氣樂に飛んで居るさ！』と、唐突に頭の上で

吐鳴られまして、今迄土の中で寐て居た蟬は、《せ》誰だい！　己がいゝ心地になつて寐て居る處を起こしやがるは？』《か》誰でもない己だ、オイ蟬さん！　冬はお前と一緒に地の中で暮した甲蟲だよ』《せ》甲蟲さんか、ヤアもうお前は飛び出したな、そいつア豪氣だ、ぢやア己も出やうから一寸待つてゝ呉れないか』《か》アゝ待つとるとも〳〵早く出て來給へ、彼方で一緒に又遊ばうよ』と云つとる内に蟬はもう土の中から頭を擡げて出て來ましたが、まだこの時は穢ない土の衣服を一枚、さも重さうに着て居るばかりで、飛ぶこともどうすることも出來ません。

之を見て甲蟲は、《か》蟬さん！　マアお前の風は夫りや何だい、不細工な衣服ぢやないか、そんな物ア早く脱ぎ捨てゝいゝのと着替なせイ』《せ》だつて着替えるのがねえんだ、さう云うお前は何處でそんな丈夫な衣服をかつぱらつて來たんだい』

《か》何だ！　かつぱらつて來たとはあんまり酷いね、乏はツイ彼方の呉服屋で、買つたのさ』《せ》呉服屋て？　そいつア面白い、ぢやア己等も其處へ買ひに行か

うか』《か》買ひたけりや連れてつて上げよう、ツイ其處だから、暫らくそのまゝで辛抱して居給へ』と蟬と甲蟲とは、どん〳〵話しながら、野原を通り抜けますと、彼方に大丸とかいた大きな紺暖簾のある店が見えますので、《せ》ヤア〳〵彼處に呉服屋が見え出したわい』《か》アレが己等の買付だよ』

と、間もなくその店に行つて見ますと、赤や青白や黄と、いろ〳〵奇麗な衣服が山の樣に積んで御座います、蟬は赤いのを手に取つて、夫れを買はうとしますと、甲蟲は夫れを止めて、《か》蟬さん！　そんな衣服は似合はないよ、それは蝶々の樣な弱々しい蟲が着るのだ』《せ》さうかい夫れぢや之にしやうか』

と手に取つたのは、薄い帷子でした、甲蟲は又夫れも止めて、《か》いけない〳〵、そんな物は見た處は涼しさうでも役に立たないからお止しな、夫れよりか己の樣に手織の丈夫なものがいゝ』

と云ひますと、蟬は何と思つたか首を振つて、《せ》之から追々暑くなるから、そんな手織縞ぢや第一汗が出て仕方がない、己はどうしても此帷子を買ふ』と、甲蟲が止めるのもきかないで、とう〳〵買つてしまひました。

甲蟲は蟬の心得違をいさめましたが、蟬は少しも耳にせず、そのまゝツイと高い木の枝に飛んで行つて、さも呑氣らしく、ジイ〳〵と鳴いて居ました。

さてその日は暮れて其翌朝のことです、甲蟲は自分の家に居りますると、その門の前をさも憫れな破れた帷子に身を慄はせて杖にすがりながら、よろ〳〵歩いて行く物がありますので、誰かと思つて一寸見ますと、之は昨日の蟬が、もう帷子も何も散々に破られて行くのでしたから、甲蟲はゾッとして、《か》やれ〳〵可哀さうな事だ、己の云う通り丈夫な着物を買ひさへすれば、あんな情ない身にもなるまいのに……。

(九)　凧將軍

昔し夢想兵衞は、大きな凧を造つて、自分が其上に乘り、鳥が飛ぶやうに、方々の珍らしい國を經過つて來たと云う話を、此上もない面白く感じた一郎はどうかして、自分も一度そんな大きな凧に乘つて、世界一週がして見度いものだと、夜の夢にも折々見るのでありました。

舊臘から葉山の海濱に寒さを凌いで、お父さんやお母さんと一所に、こゝて目出度いお正月を迎へた一郎は、或る時海岸に出て見ますと彼方の村里では今や小兒が打ちよつて、さも樂しげに凧を飛ばして居ります。

見れば自分も又急に凧があげて見たくなりましたが、相憎く大切な奴凧は、こゝへ持つて來ては居りません、と云つてこんな田舍に賣つてるのは、小さなケチな凧ばかりて、迚も玩具にはならないはて殘念なことをした、と、一郎は齒噛みして口惜しがつて居りました。

すると不思議ぢやありませんか、彼方の雲の中から小さな奴凧が現はれて、氣の故か、一郎の居る方へ向つて來ます。

《一》ヤアあの凧は糸を切つて飛んだと見えるどこへ落こちるだらう海の中かしら、夫れとも後の山かしら』と、一郎は他目もふらず一心に奴凧の行方を眺めて居りますと、凧はだん〳〵近くなると共に、ブウーンブウーンとうなりながら、もう一郎の目の前へ來たかと思ふと急に聲をかけて、《奴》坊ちやん！　奴がやつて參りました今日は天氣もよく、風は丁度持つて來いと云うお誂向き、今朝お宅

を飛び出しまして、後方此方見物して參りました』見れば豫て一郎が大切の凧、ツイ此處へ來る時に、家の押入に仕舞つたまゝ、置き忘れて來た奴凧せめて今こゝにあらばと思つても所詮及ばぬ話と、口惜しく思ふ其矢先に思ひ掛けなく、わざわざ奴がやつて來ましたので、一郎はもう大喜び、《一》よく來てくれた本當にお前は豪いよ〳〵』《奴》坊ちやん、私は貴方に別れたから、どんなに淋しかつたかしれませんよ何しろ押入へ仕舞はれて、何方を見ても眞暗てすが、今に坊ちやんが來て下さるだらうと待つて居ても、一向に其樣子が御座いませんので、或る日猫の玉に聞いて見ると、坊ちやんはもう疾くにお旅立成る程お聲が聞えないのも道理だと、夫れからは毎日淋しく暮らして居ましたが、もう矢も楯もたまらず、とう〳〵お家を逃げ出して遙々やつて參りました』

と、奴の物語に、一郎は感心して、《一》奴や！　私が惡かつた、どうぞ勘忍して、をくれ、もう之からは、決してそんな事をしないから』

とさも氣の毒さうに云ひますと、奴は却つて頭を下げ、《奴》イヤ私こそおゆるしを願たう御座います、無斷てお家を飛び出して、萬一途中て海へても落ちやう

ものなら、もう取り返しがつきませんでしたどうぞ坊ちやん、御勘弁遊ばしませ』と、奴に似合はぬ物の言ひ振り、一郎はいよ〳〵感心して、《一》もういゝよ、そんなに改まつては困るなア』と、さもきまり悪さうに外へ向き、やがて又何か思ひ出したやうに手をうつて、《一》ウンさうだ、時に奴に相談があるが、どうだ一つきいて呉れぬか』《奴》何て御座いますか、この奴の力でお間に合ひ申す事ならば、どんな事でも致します』

《一》外ぢやないがネ僕ア久しい前から世界一週をして見たいと思つてたが、どうだお前の腕ぢやない、その翅の力で、一つ僕を連れて行つて呉れまいか』と聞いて奴は、驚きましたが、又考へ直して、《奴》坊ちやんそいつは、至極面白いお企て、御座います、奴一身の力を以て、是非共一つやつて見ませう』と云うに一郎は力づき《一》さうか、夫れは有り難い、ぢやア明日と云はず、今から出かけ様ぢやないか』《奴》よろしう御座います、確に御請合申します』と云うかと思ふと奴凧は、見る見る内に海一ぱいの大凧になり、その翅の上に一郎を乗せ、ブウーン〳〵と恐ろしく大きなうなり聲を立て乍ら悠々として遠く海の彼方に乗りだして行きまし

たとさ。目出たし！　めでたし！

(一〇) 笛の魂

兄さんが今年夏休みにお歸りの時そのお土産に戴いた一本の銀笛は、三郎が又となない大切の品で、夕暮月の窓にも雨の日のお座敷にも、時々その美しい音色を聞くのでありましたが、この頃は餘程巧みになつたものと見えて玉の宮居でも汽笛一聲でも、もう自由に吹くことが出來るのです。

或日のこと、三郎は例の銀笛を取り出して、口唇に當てやうとしましたが、何と思つたか、先づ吹く前に一寸笛の孔を覗いて見ました。

笛の口に唇を付けて、兩手の指で笛の孔を押へたり放したりすれば、いろ〳〵な音が出るのは、一體どう云う譯であらうとは、三郎がいつも笛を吹く度に、首を傾げる問題でありました。

けれどもいくら見ても笛の孔にも又その口にも、音の出さうな仕掛けは少しもなくて、只中は筒になつて居るばかり何も見えませんので、三郎は又思ひ直し、今

度は初めの低い調子からだん〳〵ヒーフーミーと、一つ宛吹いて見ますと、その中からは、吹く度毎に一つ宛、不思議なものが飛び出して次第々々に其數が殖えて、はてはずつとお庭の彼方まで續きました。

三郎は之を見て、さては笛の音が出たのかと、やや暫くは驚いて居ましたが、やがて人間に物言う如く、《二》オイ〳〵、お前達は一體何物だ？』と尋ねますと、其不思議な形をして居る者共は、之も人の樣な聲をして、三郎の問に答へました。

《笛》ハイ、私共は決して怪しいものではなく、全く笛の魂であります、實は貴方が常日頃から、笛の中にはどんな者が居るかと、力任せに笛を振つたり、又孔を覗いたりなさるので、私共も我慢が仕切れず、ツイ飛び出して見る氣になりました』と皆々口を揃へて云ひますので、三郎はもう大喜びです。

《二》さうか、おやアお前達はさぞ歌が上手だらうね、僕の前で一つ歌つて御覽よ』

《笛》よろしう御座います、何ても仰せの通りに歌ひますから、坊ちやんのお好きな歌を何なりとも云つて下さいまし』《二》よろしい、僕ア『箱根八里』が好きだけれどどうしても六ケ敷くてあれ丈は未だ吹かれないのだ』《笛》箱根八里ですッて、エヽそりやアお安い御用です、夫れでは歌ひますから、よくお聞き下さいませ』とこいで例の笛の魂は、首を振つたり手を動かしたり、種々樣々の風をして面白おかしく、二度程歌つたかと思ふと、急にお辭儀をしながら、《笛》坊ちやん！　どうもお喧しう御座いました、さよなら、さよーなら、さよーなら』と各自に挨拶して、再び元の笛の孔へと、ピヨン〳〵飛び込んで仕舞ひました。

三郎は、暫らくぼんやりとして見て居りましたが、如何にも今笛の魂が歌つた歌が面白いので、自分もあの樣に吹いて見やうと、例の笛を口唇に當てゝ心を落ち付けて吹きましたが、只調子外れの音がプープー出るばかり。

さては魂が孔に居て、邪魔立するのではあるまいか、それならば今一度引き出して、あの面白かつた箱根八里を歌はしてやらうと、又一つ宛、ヒーフーミーと、途切れ〳〵に吹いて見ましたが、出るべき筈の魂は只の一人も出ないのです。

《三》オイ〳〵笛の魂！　早く出て來ないか愚圖々々しとると、容さないぞ』と云ひましたが、もう笛の魂は、ヒソとの聲もなく何處にどうして居るのやら、影も形も見えません、《三》エヽ馬鹿な笛の魂め！　それぢやアこうして呉れやうか』

と、三郎は突然笛を地上に投げ捨てゝ、お庭にあつた大きな石を持つて、來て、ドシーンと笛に投げ付けますと、笛は其まゝグニヤリと曲つて、最早や少しも鳴らなくなつて仕舞ひましたとさ。

(二) 月夜の蛙

蛙は其目が上の方に付いて居りますから、水の中に居ても、よく空にかゞやく星や月の影を見ることが出來ますが、其代り下の方を見ることが出來ませんから、下の方が見たい時には、お腹を上に向けて游がなければなりません。

或晩の事でありました蛙は獨りお池を出て、岸にボンヤリ立つて居りますと、突然お池の波の上から、お月樣が聲をかけて、『月』ヤア蛙さん！　君は其處に居るかい』

と云ひましたけれども蛙の目は上の方に付てるもんだから、まだ其聲が何處から、聞えて來るのややら、少しも解りませんでした。

『蛙』さう云ふお方はもしやお月さまぢや御座いませんか』と、空を仰いで見ましても、空のお月樣は素知らぬ顏して耀いて居ります。

すると又足元の池の中から、『月』さうだ僕ア月だよ、どうだい今夜は久々て一つ面白い歌でも聞かせないか』

蛙にはまだ池の月かげが見えますが、見えるは空の月ばかりてす。

『蛙』お月樣！　一體何方は何處に居るのてす、姿は天でお聲は足元、どうも怪け物みた樣な人ぢやないか』と、蛙は兩手でお腹を抱へて、思案して居りますと、『月』見えないか！　僕は矢張此處に居るよ、見えないか〳〵オイ〳〵蛙さん！』と笑つて云つて居りますから、蛙はいよ〳〵躍起になり、腹をヒコツカせたり、目を廻したりしてみましても、どうしても月の聲する處が解りませんから今度は蜻蛉返りをして、仰向きになつて見ました。

『蛙』ヤア大變だ！　今夜は月がお池に落こちたぞ、乏ぢやお池の水が金になつて、己等も金佛ぢやない金蛙にならア』

と、蛙は倒になつて、カラ〳〵と笑ひますと、月は矢張キラ〳〵笑つて、『月』さうは行かないぜ僕アなか〳〵水くらいには溶けないよ』『蛙』溶けないたつて溶かし

て見せる』と、蛙はムックリ起き上つて夫れから蒲の穂を取つて、お池の水をジヤボ〳〵と掻き廻しますと、今迄映つた居た眞ん丸のお月樣は散々に碎けて、キラ〳〵とお池一面金の水を溶かした樣になりました蛙は之を見て大得意です。

《蛙》どうだお月樣之では降參でせう、この中へドブンーと飛び込めば、何の造作もない私の體は金無垢になられる何と何白い手段ぢやないか』と、鼻てはない腹をペコ〳〵して、喜んで居りますと、お月樣は平氣な顏て《月》こんなに碎かれても不思議な事には亦元の通りに固まるよ、ソレ御覽！　だん〳〵破片が寄つて來るだらう』と、お月樣は笑つて云ひますと、成る程其通り月の破片は波が靜まると共に亦まんまるの形になつて仕舞ひました。

《蛙》ヤア之は大變だぞ、よし〳〵今度は本當に打ち破つてやらう』と、傍にあつた小石を拾つて、其お月樣の面の處へボカリ〳〵と投げてやりました。

すると金色の波が四方へ飛び散り月の破片は何處へか消へ去つた樣に見えますので蛙はいよ〳〵得意になり、《蛙》夫れ見ろ！　とう〳〵月が碎けて飛んだぞ、かう飛んでみれば何ぼ丸くならうと思つたつて、不具の月だ態ァ見ろ！』と、

大口開いてカラ〳〵笑つて居ますと、やがて亦波が收まると共に、今迄碎けて居た月が、彼方からも彼方からも、一つ〳〵集つて來て、亦もや元の通りの眞丸いお月樣になつて仕舞ひました。

之を見て蛙は少々自暴を起し、どうかしてお月樣を降參さしてやらうと、腹の上て手を組んで、じつと考へ込んで居りますと、月は嘲り顏に、《月》どうだ、不思議だらう、何度碎かうと思つても、又元の通になつちまうから仕方がないなア』蛙は默つて居りました、あんまり苦々しいので、歯を食ひしめて、何とも言ひませんでしたが、やがて何か思ひ出した樣に、《蛙》どうしても碎く事が出來ないのかしら』《月》さうだ、どうしても碎かれないよ』《蛙》碎かれなくても碎いて見せるぞ』《月》どうして碎くつもりなのだ』月の聲のまだ終らないのに蛙は。《蛙》かうして掻き廻して仕舞つてやれ！』と、最早や石や草の穗では駄目だと思ひましたから、自分でお池の水を掻き廻しますと、道の月も散々に碎かれて、影も形も見えなくなりましたから、蛙はヤレ嬉しやと氣をゆるせばがつかりと體が疲れて、手も動かず、足もまた働かず、土左衞門の樣に水の上に浮いて居りますと、《月》蛙さん！

君は影を碎かうとして心配して呉れたが本當の月はちやんと玆に居るから、ちつとも碎かれないのだ』と例の如くキラ〳〵笑ひ出します。之を聞いて蛙はギョッとして、空を見上げますと、眞丸な月がちやんと一つ照り耀いて居るのに吃驚して、《蛙》ヤー迚も之は駄目だ、金の蛙にならうと思つても、月が碎かれなきやア駄目だわい』と、そのまゝお池の底に潛り込んだまゝ夜は再び浮び出ませんでしたとさ。　めでたし〳〵。

(二)　蜃氣樓

體がヘナ〳〵して骨と云うものがありませんから、堅い貝殼を破つて居ても、夫れでも猶敵が來て酷めますので、僅に小さくなつて砂の中に埋まつて居るばかり、只二つの口から水をアブ〳〵吐き出したり吸つたりして、辛くも生きて居るのは蛤であります。

さても蛤は例に依つて、砂の中に埋まつて果敢い生活をして居りますと、口の處で誰とも知れず『蛤公！蛤公！いつ迄砂に潛つて居る、コラ夜が明けたぞと、大き

な音を出す者がありましたが、元より蛤は目が見えないものですから、誰が呼んで居るのやら、まだ知らないのです。

《蛤》誰だい！お前はツイに聞き馴れない人の聲だネー、又私を食ひに來たのだらう怖い人だネー』と、蛤は急に二つの口を閉ぢて、猶ムク〳〵と砂の中へ潛り込まうとします。今蛤公と呼だのは、之は大きな海龜であります。《龜》蛤公！目が見えないて氣の毒だねえ、だが心配するな、己は蛤公を食やアしない、其代り面白い處へ連れてつてやるよ、足がなけりや負んぶして行かうか』と龜の子は親切らしく言ひますと、蛤公は嬉しがつて、《蛤》ぢやアネ龜の子さん！　連れてつて頂戴な僕アこんな處に居て隨分怖いのだ』と、蛤は心細い事を言ひますので、龜の子は益々付け込みまして、《龜》蛤公は知つてるだらうね』《蛤》何をよ』《龜》何つてネ、お前の口の中から出る蜃氣樓をよ』《蛤》蜃氣樓つて何だい』《龜》そんな事知らなくて困るなア、僕がネ昔し浦島さんのお伴をして行つた龍宮みたいな處さ、その蜃氣樓がお前の口から出る息て出來ると云うぢやないか、こんな詰らない海の底にいつ迄へばり付いて居るのぢやネ早く陸へ行つて蜃氣樓を吹て御覽

よ』『亀の子はさも面白さうに話しますと蛤もうつかり其氣になりまして、《蛤》だつて亀さん、なんぼ行きたくつても私は陸へ行かれやしない』と體をモジ〳〵させて居ますと、亀の子は又《亀》だから私が先から云つてるぢやないか歩かれなきやアおんぶしてつて上げやうと云うぢやないか、さア早く私の背中にお乘んなさいちつとも怖かないよ、丸で親船に乘つた様だから』と、亀の子は蛤を連れ出して、ドン〳〵海の中を泳いで居ります。

蛤は之迄砂の中にばかり潜つて居たものですから海の中の景色を見るのは之が初てゞ、右を見ても左を眺めても、珍らしい處ばかり、どうやら目も廻りさうて御座います。

亀の子はやがて蛤を連れ立ちて遙々海の岸に出ましたが、茲には又たキラ〳〵として、お天と様が照いて居るし、廣い砂原の中には、いろ〳〵の草花が咲いて、何とも云う事の出來ぬ景色なので、蛤は貝殻の中から小さな目を時々出して、嬉しがつて見て居りました。

《亀》どうだ蛤公！　本當に奇麗だらう、ソラ彼方に見えるのが龍宮だよあの龍

宮はどうして出來たのだか知つてるの』と、わざとらしく聞き出しますと、蛤は反身になつて、《蛤》知つてなくつて、僕の口から出た息の塊なのさ、さう思へば猶更奇麗の様ぢやねエ』

と蛤は自惚れて居りました。亀の子が今蛤に見せてやつた蜃氣樓と云うのは、本當の蜃氣樓ではなくて、海岸にある町で御座いましたが、蛤はそんな事は少しも知りませんから本當に自分の口から出たのだと思ひ、《蛤》亀の子さん！　あの立派な町へは僕だつて行かれるの？』と、もう行きたくて仕樣がないので、夫れとはなしに謎をかけますと、亀の子は肯きながら、《亀》アヽ行かれるとも〳〵元々お前の口から出たのだもの大手を振つて行かれるのだサア行かうから又背中にお乘りよ、あの御門の中にはネ、蛤公の好きな御馳走は何でもあるよ本當に蛤公は果報者だ、寝て待てと云うのも本當だネ』と、亀の子は例の旨い調子で云ひますので蛤も圖に乘りまして、《蛤》おやア早く行かう、亀の子さん後生だから何分頼むよ』と、やがて喜色滿面大得意の蛤は又亀の子の背中に乘りまして彼方の町の方へやつて行きました。

亀の子は蛤の云う通り、何てもよしよしと云うて、しばらく歩いて居りましたが、何しろ暑い夏の事ですから、日はカン〳〵と頭の上から照り付けて、其れがために蒸し殺されさうであります。

一度もまだ陸の上へ来た事のない蛤は、最早や辛抱が出来ません。《蛤》亀の子さん！　暑いネ本當に暑くて耐えられない、もう僕ア海の中の方がよくなつたから早く歸しておくれよ』と、泣聲になつて頼みましたが、亀の子はきゝませんで、首を左右に振りながら、《亀》イヽエ夫れはいけない、かうして暑い處もかまはずに重い〳〵お前を連れて、来たのも、彼方へ行つて御馳走のお招伴になりたいばかりだ、夫れに今となつて行くことが厭だと云つたとて、無理にでも連れて行かなけりやア承知しないよ』と、剛情を張つて居りますから、今更蛤も返す言葉はなく、餘儀なく又默つてしばらく行きますと、やがて亀の子は振り向いて、《亀》蛤公！　僕は咽が渇いて困るから一寸水を一杯飲んで来るよ、お前は一人でこゝに待つておいて』と云ひますと、蛤は大に驚いて、《蛤》それなら僕も一所に行かう』けれども亀の子はきかないで、強く首を振りながら、《亀》イヤ夫りや真平だ、お前の

樣な重い奴を負ぶつたもんだから、夫れで汗がダク〳〵出る、咽も渇いて仕方がない贅澤にも人の背中に居て、そんな事が言はれた義理かい』と亀の子は無殘にも蛤を捨てゝ置いて、一人て海へ逃げて行つて仕舞ひました。

可哀想に蛤は、一人取り殘されてオイ〳〵泣いて居りましたが、足がないので海へ歸ることも出來ず、取りつく島もないので御座います。

兎角する内にどうして見付けたのか、其處等に歩いて居る蟻が集つたり、蠅が寄つて來たりして、チクリ〳〵刺して見たり、メソ〳〵嘗めて見たりしてとう〳〵蛤を食ひ殺して仕舞ひましたが亀の子は再び歸つて來ませんでしたとさ。

めでたし〳〵。

（三）　寶珠取り

或る湖の眞中に、大きな島が一つ御座いまして、其島には又古い大きな岩穴があり、其又岩穴の中には小さな辨天堂があつて、辨天樣が祀つてありました。辨天樣のお使者に蛇の足内と申す男が御座いましたが、年頃忠儀に立ち働きますので

辨天樣の御信任も、日一日と加はりました。

今年は丁度巳の年で、足內の當年ですから、辨天樣は元日の朝、自分のお居間へ足內をお呼びになり、《辨》これ足內や、今年は其方の當り年で何か御祝儀をやらうと思ふが其方所望の物はないか』

と、お尋ねなさいますと、足內は恭しく首を下げながら、《足》ハイ、永年御恩に預りまして、其上御祝儀などを戴きましては恐れ入りますから、どうぞ其御心配は御無用になされまして……』と、足內は神妙に御斷りを申しますと、辨天樣は重ねて仰しやいますには、《辨》夫れぢや足內其方も承知の通り、此湖の底に棲む龍王が、秘藏の寶珠を取つて來る勇氣はないか、若も首尾よく其寶珠を取つて來たら褒美は其方の望み次第だ、何んと足內、一奮發して見る氣はないか』と勵まされて足內は、《足》何と仰しやります、湖水の底の龍王が、大切にかけて持つて居る、あの寶珠を取つて來いとの御意夫れは足內願つてもない面目で御座ります、イザ此足で早速龍王の處へ出掛けませう』と、勇み立ちますと、辨天樣は又考え深い質ですから、《辨》足內よ、そんなに急いでは事を仕損ずる、まづ心を落ち付かせて私

の云う事をおきゝ、一體あの龍王は素手で行つたとて手にのる奴ぢやない、夫れに就いて私が、秘藏の鏡をやるから、危急な時には此鏡を見ろ』《足》有り難う御座ります、いろ〳〵御心配を下されまして、恐入りました、夫れでは遠慮なく御鏡を拜借致します』と、足內は辨天樣から奇麗な一面の鏡を戴き、之を大切に懷中に仕舞つて、《足》夫れぢや行つて參ります』

《辨》ア、氣をつけて行つて來な途中で路草を食つて拔かるまいぞえ』と、茲で蛇の足內は辨天堂を出て、湖水の底へと千尋の波を潛りました。

足內はまだ馴れぬ路を一人て急ぎますと、遙か彼方に朱塗の門が雲に聳えて立つて居ります。

《足》オヽ最早や龍王の處へ來たと見える、隨分氣を付けて行かねばなるまい』と、やがて其門の前まで行つて見ますと、門は兩方から固く閉ぢてありまして、手でウン〳〵押した位ではなか〳〵開きさうもありません。

《足》足內が參りました辨天樣のお使が參りましたから、門を開いてお通し下さい』と呼び立てますと、中から門番が、《門》其樣なものに用はない、さツさと歸れ

〳〵と吐鳴ります、』けれどもこゝまで來て阿女々々〳〵歸る事は出來ないので、足內は門の扉を叩き破つても這入らうと考えて居りまする內不圖思ひ出したのは、あの辨天樣から頂戴した鏡の事でした。

急いで懷中から夫れを取り出して門に向つて照らして見ますと今まで中から門の扉を壓へて居た龍王の家來共は、みんな其光に目を眩はして、一時に倒れて仕舞ひましたから、其はづみで門は一押にギーッと開きました。

さて足內は之に力を得まして、ズン〳〵奥の方へ進み丁度龍王の居間にまで參りますと、今日はお正月ですから、朝からお酒盛が初まり隨分賑かな事ですが足內は其坐の中へ割り込みまして、《足》恐れながら龍王樣に申し上げます、辨天樣のお使に立つて足內之へ參上致しました、先づ謹んで新年の御祝を申し述べますと、足內はかしこまつて頭を下げますると龍王は、火の樣な口をカッと開いて、《龍》笑止や足內辨天樣のお使にたつて、此龍王の餌食になる氣か、高の知れた小蛇一匹丸呑にしても物足りないヮ』と、怒つて居りますが、足內は別に氣にもかけず、《足》龍王樣には以ての外の御不興な御氣色初春の目出度さに此足內

奴を御肴に召して、今一獻御飲み直し遊ばされたらばよろしう御座りませう』と頻りに氣元を取りますと、龍王少しは面を和らげ、《龍》ウンよく云つた足內立つて舞へ者共一囃し騷げ〳〵』との事に、足內は立ち上り先づ龍王に向ひ恭しく挨拶をしまして、《足》不束な手舞御覽に入れまするのも恐れ多い次第では御座りますが』とやがて囃子の拍子につれて、足內は長い袴でトントンと地を踏み、垂衣の袖を打ち振り〳〵、立つて舞ふ姿が如何にも面白く、長袴の裾を踏でころげたり袖が首にひつかゝつて取れなかつたりして、一座の面々が皆吹き出しました。

中にも龍王は腮をはづして、息を切らしさうに笑ひましたが、其調子で腮の中にある寶珠がコロ〳〵と轉つて足內の傍へ來ましたから、早くもこけた眞似をして其珠を拾ひとり、又立つて舞ひ出しましたが龍王は未だ寶珠を落とした事に氣付きませんでした。

足內は首尾よく目的を達しまして目出度く舞ひ了りますと、龍王は滿足の體で、大層足內の舞を褒め、更に又酒宴が初まりましたが、急に何か思ひ出した樣に龍王は、

《龍》腮の寶珠をどうしたか、あんまり笑つてどこへ飛ばしたやら』と、目を丸くして四邊を見廻しますと、並居る家來何れも目を丸く顏を青うして心配し出しました。《皆々》何あの寶珠がなくなりましたと、夫れは大變で御座います何でも之はオヽあの足內が盜んだに相違ない』と皆な起つて足內を捕へやうと思ひますと、足內はいつの間にやら、もう御殿を拔け出して、影も姿も見えません。《龍》チエー口惜しい早く物共……足內を捕へて寶珠を取返して來い』と齒軌をして地團駄を踏んで口惜しがる自分も刀を提げて多くの家來を從へながら、足內の後を追ふて出掛ますと、足內は寶珠を手に捧げて悠々と波を押し別けて居りますから、龍王は之を睨で大音上げ、《龍》ヤア〳〵足內よくも汝は寶珠を盜みおつたさア尋常に返せ〳〵』と刀を振つて向つて來ます。足內はどうしやうかと思ひましたがこゝぞと例の鏡を出して照らしますと、その威光に恐れて、グタグタと鹽をかけられた蛭同然みんな敗けて逃げて仕舞ひ、足內は無事に辨天堂に歸り着き寶珠を辨天樣に献上致しまして、厚く御褒美を戴きましたとさ。めでたし〳〵。

(一四) 草刈鎌

同じ野に棲む蟲でも、人に嫌はれるものもあれば、又好かれるものもあつて、鈴蟲などは皆に重寶がられますが、飛蝗の樣なものは、何處へ何つても嫌はれて居ります。こゝに飛蝗のお友達に精靈飛蝗と云ふ男がありましたが、何しろ飛蝗の樣な惡いお友達に交際して居るものだから、仲間での請も甚だよくないのであります。

精靈飛蝗は自分の形が餘程よく螳螂に似て居ますのに、螳螂程に人が扱つて呉れないのは、如何にも不都合だと思ひまして、或る日種々と工夫をした上どうかして自分も螳螂の樣な鎌を買つて、野の草でも刈り集め、せめてお百姓の手傳をして名譽恢復をしやうと殊勝な心を起し、一人て鎌を買ひに出掛けました。すると不思議ではありませんか遙か彼方の草の中にまだ新らしい鎌が而も二挺ちやんと揃つて落ちて居ります。之れを見た精靈飛蝗は一人で喜びながら、《精》オヤッ！鎌だ鎌が落ちてるぞ、揃ひも揃つて二挺あるとは本當にお誂へ向

だ、誰の所有だか知らないが落ちたものを拾ふにやア巡査さんに叱られる様な氣遣はあるまい』と、例の長い足で威勢よく飛んで行つて、其の鎌を拾ひ取らうとしますと、鎌はカッと口を開いて、《鎌》精靈さん、君は全體斷なしに僕を取つて行くのは無法ぢやないか、錆たりとも失禮ながら、僕は君の自由にやならんぞ、』と、鎌は固くへばり付いて、動きません、精靈飛蝗は之を聞いて、わざと優しさうに、《精》鎌さん君そんな剛情を云うもんぢやない、僕は之から螳螂の仲間へ入つて草を刈うと思ふんだ』《鎌》エッ、草を刈るつて、聞いてあきれるワ、君の様な痩腕にどうしてこの鎌が持たれるものか』と、何と云つても聞きません、精靈飛蝗はどうしても鎌を手に入れたく思ふものですから、《精》だが鎌さん、そんなに腹を立てないで疾と僕の云う事を聞いて呉れ、僕だつて無理を云うのぢやないから！』《鎌》だつて君は僕を取つて行かうとするのだもの、僕も次郎さんと三郎さんと云う二人の主人があるからには、默つて君に取られて仕舞ちやア申譯がないぢやないか、夫れを察して呉れたら、あんまり無理な注文は出來まいと思ふが』《精》夫りや夫れに違ひないさ、併し鎌さん實は僕も人から厭はれて困るので、一

そ螳螂の仲間へ入つて草でも刈らうかと思ふのだ』と聞いて鎌は不思議さうに、《鎌》君はそんな事を思つてるの？　螳螂は草を刈る様な野暮な男ぢやないぜ』《精》だつてあの鎌は草を刈るためのだらう』《鎌》處がさうぢやないのさ、あれは草を食ふ君の様な蟲を捕つて食ふのぢや』之を聞いて精靈飛蝗は非常に怒りまして、《精》鎌さん君は實に失敬なことを云うな、なんぼ僕が弱味を見せるからとて夫れにつけ込んでへらず口を叩くとは不屆ぢやないか』《鎌》不屆とは君の事さ、無斷で人の所有物を持ち去るのは泥棒だ、イヤ泥棒飛蝗め』と、鎌は負けない氣になつて大に論判しますと精靈飛蝗も堪りかねて、《精》よし覺えて居ろ、今に痛目を見せてやるぞ』と、精靈飛蝗はツーイと高く飛んで行きましたが、やがて何處からか、蟹草や野葡萄の蔓を澤山集めて來て、《精》見ろ！　因果は覿面だぞ、之で縛り上げてやるから其心算で居ろ、泣かうがべそかこうが、もうかうなつちや容しやしないぞ』と、精靈飛蝗は無二無三、その蔓を以て二挺の鎌を縛りまして、そして蔓の一方を手にかけて、エンヤラエンヤラ牽き廻りまして、さても精靈飛蝗は二挺の重たい鎌を牽き廻してやがて大分疲勞れて來ました

から、汗が額の上からヂリ〳〵と出かけました。

《精》アヽ疲れた疲れた、汗はだくだく出るし、息はセイ〳〵して來たどりや一休みして草でも刈り初めるとしやう』と、草の中にどつかと座つて、しばらく休んで居りましたが又思ひ出した樣に《精》さア鎌の動き出さない内に刈らう〳〵』と精靈飛蝗は精一ぱい、双手に鎌をおつ取つて、あたりの草をサッサと刈り初めました。

今迄默つて耐えて居た鎌は、此時急に頭を擡げて《鎌》默つて居るかと思つて、隨分人を虐待するな、僕は精靈飛蝗なんぞに使はれるやうな腕は持たないのだ』と威張つて見せますと、精靈飛蝗もきかぬ氣になり《精》何を小癪な事を云うのだ己がかうして使つた日にやアお前も名譽だからさう思つて安心しろ』と、惡まれ口を叩いて居ます。

《鎌》よし、夫れぢやア僕も考がある、さアかうしてうんと力を入れて置くから、之ても刈れるのなら刈つて見ろ、お氣の毒樣な、お前の腕にや一寸乘らない代物だぜ』鎌は腕に力瘤を入れて、急に重くなつて仕舞ひましたから精靈飛蝗はいくら藻掻いても最早や鎌は動かなくなつて、どうする事も出來ず、只出るものは汗ばかりであります。

《精》オイ鎌さん！　そんな剛情を起すもんぢやない、もつと輕くなつて呉れ汗が出て仕方がない』《鎌》いけない〳〵、もうかうなつちや少しも動かないのだよ』と鎌は一生懸命に力を入れて居るから、之には流石の精靈飛蝗も閉口して、《精》アヽ詰らない、矢張り己が螳螂の眞似をしやうと思ふのは不心得だ、人は誰でも其分を守つて居りやアよいのだ、ウンさうだ〳〵』と精靈飛蝗は大に悟つて、其まヽスゴ〳〵と彼方の草の中へ遁げて行きましたとさ。

(一五)　シヤボン玉

シヤボンを水で解かして、それを管の先に付けて、しづかに口で吹きますと美しい五色の玉になつて、フワ〳〵と上りますが、また忽ち消えて、どこへ行つたか影も形もなくなりますので、これは多分魔物が來て食つて仕舞ふに違ひないと思つた太郎は、たつた今消えたばかりのシヤボン玉を尋ねに出かけました。

《太郎》迷子の迷子の玉やさん、山に居るか野に居るか、天上の雲に呑まれたか、地上の蟻に引かれたか、迷つて居るなら早く出ろ』と呼びましたが、オイともハイとも返辭が御座いませんので、さてはもう魔物に捕られて仕舞つたかと、溜息をつきながら、スゴ〳〵歸らうとしますと、不思議や彼方の林の中で、ヒソ〳〵と話しの聲が致します。

やアあそこに居るに違ないと、急いで其側へ行き、《太郎》玉やさん！僕アさつきから探して居たよ』と思はず大きな聲を立てますと中からシャボン玉が大勢出て來て、《玉の一》太郎さま！ようこそ尋ねて來て下さいました私達は毎日〳〵氣樂にこゝで暮らして居ります』《玉の二》太郎さま！まことに久しぶりでおなつかしう御座います私共はおかげ樣で無事であります』《玉の三》太郎さま！いろ〳〵御心配下さいまして恐れ入ります、今日は亦わざ〳〵お尋ね下されて有りがたう御座います』と一人〳〵ピヨコ〳〵頭を下げながらお禮に出て來ましたので、太郎は死んだ子に逢つた親の樣に何とも云うことの出來ぬ嬉しさに、踊り上つて喜びますと、シャボン玉は顏を青くして震ひ上がり、《皆々》そんなに

踊つちやア大變です、一寸でも風が吹かうものなら私達の體はみんな碎けてしまひます』こゝに太郎が揚げたシャボン玉は、みんな此の林の中の、風が當らない所に來て居るのですが、その數は百や二百どころでなく、洞穴の中にも木の穴洞にも、一ぱいになつて居ります。

このやうにシャボン玉は、何れも風を怖がつて居るので、一寸でも風の吹きさうな日には、みんな空洞の中にこもつて、少しも外へは出ませんが、只天氣がよくて、風のない日には近所の野原へ行つたり、山へ行つたりして遊んで居るのです。

《太郎》風が吹くと消えるッて、隨分ひどい風だなア、よし〳〵僕がこれから其風を退治てやるからお前達は僕の所へ來て遊ばないか』と、尋ねますと、玉共は嬉しがつて、《皆々》有り難う御座います、それぢアお言葉に從つて參りませう』と云ひますので、太郎はシャボン玉を行儀よく並ばせて勇ましく號令をかけ、だん〳〵やつて參りますと、如何にも面白くて、何だか自分がシャボン玉の隊長になつた樣な氣がしますから、又改めて號令をかけました。《太郎》すべて兵卒と云うものは大將の號令を守らなければならぬ、そこで予は汝等の大將であるから、汝等

は予の號令を固く守れ、解つたか〳〵』するとシヤボン玉は聲を揃へて、《皆々》大將の命令は確かに解りました』《太郎》ぢやァ軍歌を一度歌つて見やう』《皆々》よろしう御座います、何なりともお出し下さい』とこゝて太郎は軍歌を歌い、玉共は一所に大聲を上ぐるのです。

玉の宮居は丸の内、　丸い玉やは恙なく、
太郎の家に歸らんと、　行列作り進むなり、
アナ嬉しイ喜ばし、　おもちやの劍をふり上げて、
太郎は玉の大將ぞ、　いざ〳〵進め兵卒よ。

《太郎》この歌が解つたら號令をかけるよ、よいか驅け足イ進め！』と太郎は先頭に立つて一生懸命に走りました、一二！一二！と號令をかけながら、家の門の所まて來て、《太郎》全隊！止まれッ！と云つて不圖後ろを振り返つて見ますと南無三寶！いつの間にかシヤボン玉は途中でみんな消えて仕舞つて、一個も居りませんでしたとさ。

(一六)　めくら蛇

めくら蛇におぢずとわ昔しからよく申しますが、之は夫れと事變りめくらの蛇が、物におぢたお話を致しませう。

まづ或る野原に、一匹の蛇が棲んで居ましたとさ、蛇と云う蟲は根がづるい奴て、他人のものをソッと盜み取つたり、弱い者をいぢめたり惡いことばかり致しますので、野原に棲んて居る他の蟲共は、みんな蛇を憎み、折を見て一泡吹かしてやらうと思ひましても、對手が強いので、いつも泣寐入になるのでした。

ある日の事て御座います、蛇は巢を出まして蛙の棲家へやつて行き、親二人子一人の蛙を親を二人とも呑んてしまい、子はまだ肉がないからと、わざと食はず、そのまゝ其所に、グソスリ寐込んでしまいました。

親を食はれた子蛙は、あまりの口惜しさに、聲も惜まず泣いて居ますと、傍の草原から、一匹の蚰蜒が出て來まして、《蚰》これ蛙さん、お前は何を泣きなさる、人前も有るから、そんな大きな音を出すものぢやないよ』と、云ひますと蛙は涙をふい

て、《蛙》蚰蜒さんまア聞いてくれ、あの例の蛇が、今日は私の家に來てお父さんとお母さんとを、みんな食べてしまいました』と云うて又泣き出しますから、蚰蜒は氣の毒がつて、《蚰》そうか夫れは酷いことをしたな、そして蛇はモー逃げてしまつたのかい』《蛙》イヽエ蛇は私の家で寐て居ます、だから私は家へ歸りたくても、蛇が居るから歸られません』《蚰》蛇はお前の處に寐て居るッて、よし〳〵夫れなら一番私が工夫をして、お前のお父さんやお母さんの仇を討つてやらう』と云いますと、蛙は嬉しがつて、《蛙》夫れはどうも有り難うございます、私が案内致しませうからどうぞ來て下さいまし』と、蛙は急に元氣づいて來ました。

蚰蜒は蛙の家へ行つて見ますと、失敬にも蛇はまだ大きな顏して寐て居ますので、蚰蜒はそろ〳〵と其頭に這ひ上り、まづ目の上に行つて、口から唾をツイ〳〵と吐き出しますと夫れが蛇の目の中に入りました。

今迄いゝ心地で寐て居た蛇は、蚰蜒の唾が目にかゝつて、急に痛くなりましたから、急いで起きて目をひらき、一目散に逃げ出そうと思いましたが、肝腎の目は少しも開きません。

《蛇》さては蚰蜒の毒に當つたのか、大變な事になつたわい』とわい〳〵泣きます、すると今迄は知らぬ風をして居た蚰蜒は、蛇の頭の上から大きな音をして、《蚰》蛙を食つたり蟲螻を呑む罰だと思へ』と云います、蛇には禁物の蚰蜒が頭の上に居るから堪まらない、蛇は泣いて一生懸命に賴みますと、《蚰》よし、そう感心に謝れば、己はこの背中から下りようが、貴樣の目は最早や開かないから、其つもりて居ろ』と云ひすてゝ、蚰蜒は悠々と立ち去りました。

蛇は盲目になり、その目からは玉の樣な涙をぽたり〳〵と落として自分の棲家へ歸らうと致しますと、途中に一匹のまい〳〵つぶろが居ましたが、蛇は夫れも蚰蜒だと思つて肝をひやし、又少し行くと蚯蚓が居ましたが、夫れも蚰蜒の樣に思はれて胸をおどらせ、又其彼方には、一疋の蛙が居ましたが、夫れも蚰蜒かと思つて、ギョッとしながら、《蛇》アヽ今日はまアどう云う蚰蜒の多い日だろう、此分では家まで行く内に、己はもう死んでしまいそうだ』と、葬りにこぼして、ようやうの事で、棲家にまで歸りましたが、夫れから後は蚰蜒を恐がつて、只の一度も洞穴から外へは出ませんでしたから、今迄物騒だつた野原も、目出度治まりまし

たとさ。

めでたし〳〵。

教育お伽噺 終

明治四十一年十月十一日印刷
明治四十一年十月十五日發行

著作權所有

教育お伽噺
（定價金四拾五錢）

著者 木村定次郎

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 飯田三千太郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目拾二番地

印刷所 株式會社秀英舎第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目拾二番地

發兌元
東京市日本橋區本町三丁目
博文館

家庭整理の指導

當代第一流の

家庭百科全書

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり、若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ことに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず、是に於て、本書は、最良なる家庭教師たる目的を以て、編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

（既刊目次）

第一篇 ●新家庭訓 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

第二篇 ●四季料理 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

第三篇 ●裁縫指南 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著

第四篇 ●和洋菓子製法 東京治庖會講師 龜井まき子女史著

第五篇 ●茶道と香道 水原翠香女史著

第六篇 ●諸流生花指南 青山御流會頭 琴松園文雅君 跡見女學校講師（古流） 松幸齋理參君 共著

婦女必讀の大全書

女子教育家編著

全部五十冊 毎月一回發行

菊判和裝大和綴美本 毎卷石版彩色口繪一葉及挿畫十數個挿入 紙數一冊約三百頁

正價一冊四拾五錢 郵稅一冊金八錢

第七篇 ●育兒の務 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 編述

第八篇 ●簡易治療法 新潟縣高田高等女學校教授 藤井靜子女史著

第九篇 ●禮式と作法 東京高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十篇 ●惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子 共著

第十一篇 ●編物指南 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 ●婦人の生理と衛生 青山學院教授 牧野淸子女史著

第十三編 ●教育お伽噺 木村小舟君著

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館

博文館發行

お伽噺書類

西村渚山外十四君作

●お伽花籠

全一冊中判上製　紙數三百頁

正價金七拾錢——郵稅金八錢

小波先生が前後九ヶ年の經營苦心になれる世界お伽噺は全部百編の完成を告ぐるに至れり之獨り我がお伽界の最大幸慶たるに止まらず實に本邦教育界に貢献したる事多大なるや言を俟たざるなり即ち先生の知友門人等相圖りて之が紀念たらしむべくお伽花籠を編し先生の勞に酬ゐんとする者蓋し機宜に適したる快擧と云ふべし花籠や現今著名のお伽作家の筆になり加ふるに新進畵伯の彩麗なる密畵を以てしたれば花間更に錦を添ふるの觀あり

巖谷小波君著

●改訂袖珍日本昔噺

全一冊袖珍上製紙數四百五十頁

正價金七拾錢——郵稅金八錢

日本昔噺の初めて世に出でしは遠く十有五年の昔にあり之を今日の隆盛時代より見れば當年編者の苦心の如き又一場の昔噺の觀あり今回世界お伽噺の完成を機として編者は更に改訂を企て繁を省き要を加へ假名遣を改め且つ携帶の便を主とし袖珍美本となし面目一新して本書と成るされば學校家庭の當時者は日常座邊に備ふべく兒童品性の陶冶美心の滋養上得る所決して尠少ならざるべし

巖谷小波君著

●合本世界お伽噺

全部拾卷

洋裝大判特製　表紙頗美麗　紙數八千頁　挿畵千三百版

▲正價壹冊金壹圓　小包料金拾貳錢

▲全部拾冊金九圓　要外小包料

本邦お伽界空前の大作として、夙に中外の認めて以て文學上及教育上の偉業とせし世界お伽噺は、編者無限の精力と、幾多少年の贊助とに依り、今春豫定の百卷を完成するに至れり、然るに多年愛讀の少年、家庭及び教育當事者よりは、之を合本として永久に珍藏したき旨續々編者の机上に來る、蓋し片々たる小冊子は、元少年の讀誦に適すべきも汚斑破損の速かなるが爲めに、家庭の保存用に適せず、本館亦疾に憂ふる所とす、即ち此期を利用して畵伯和田英作君の意匠を煩し、金模樣燦爛たる函入美本として、同好の諸子に頒つべき運となれり、日本幾萬の學校、家庭は正に此美本を得て、獨り室内の裝飾たるに止まらず、兒童教養上無限の効果あるべしと信ず、切に愛讀を祈る。

木村小舟君　武田櫻桃君共編

●少年畵談日本武將傳

全一冊大判百六十四頁

正價金貳拾八錢——郵稅六錢

日本古來の武將の中で、特に南北朝時代の重なる忠臣の事蹟を述べたのが本書であります、著者は多年此種の著述に經驗ある人、其平易にして趣味ある筆と、多數の木版密畫と相俟つて少年諸君の好伴侶たるべき至極可愛らしき好冊子となつて出ました、されば諸君は此書に依つて古英傑の人となりを知り、併せて忠君愛國の志を養ふことが出來やうと思ひます、幸に御購讀あらんことをお勸め申します

巖谷小波君著

●明治お伽噺

全部十二冊　洋裝大判

毎冊約百二十頁　木版密畵數多挿入

一冊金拾貳錢　六冊六拾七錢

十二冊壹圓廿八錢　郵稅一冊四錢宛

一 お伽十番　七 新伊蘇普物語

二 お伽三幅對　八 お伽十二支上

三 新八犬傳（上）　九 同　下

四 同　（下）　一〇 お伽洋行船上

五 お伽四天王上　一一 同　下

六 同　下　一二 お伽立志噺

巖谷小波君著（全部廿四冊大判洋裝）

●日本昔噺

毎冊約六十五頁　木版數多挿入

正價●壹冊金五錢　●十二冊五拾貳錢　●廿四冊壹圓　▲郵稅一冊貳錢宛

一 桃太郎　一三 八頭の大蛇

二 玉の井　一四 兎と鰐

三 猿蟹合戰　一五 羅生門

四 松山鏡　一六 猿と海月

五 花咲爺　一七 安達ヶ原

六 大江山　一八 浦島太郎

七 舌切雀　一九 一寸法師

八 俵藤太　二〇 金太郎

九 かち〳〵山　二一 雲雀山

一〇 瘤取　二二 猫の草紙

一一 物臭太郎　二三 牛若丸

一二 文福茶釜　二四 鼠の嫁入

巖谷小波君著（全部廿四冊大判）

●日本お伽噺

毎冊約八十頁　木版密畵入

正價一冊金六錢　●十二冊六拾五錢　全部壹圓貳拾錢　▲郵稅一冊貳錢宛

一 八咫鳥　四 源三位

二 田村將軍　五 八幡太郎

三 玉取　六 武藏坊

七 一休和尚　一六 櫻井驛

八 東照宮　一七 草薙劍

九 姨捨山　一八 日吉丸

一〇 川中島　一九 文覺上人

一一 玄武門　二〇 和唐内

一二 白虎隊　二一 高千穗

一三 鎭西八郎　二二 鬼童丸

一四 最明寺　二三 熊本城

一五 朝比奈　二四 宇治川

大和田建樹君著（全部廿四冊洋裝大判）

●日本歷史譚

毎冊約百頁　木版密畵入

正價一冊金八錢　●十二冊八拾五錢　廿四冊壹圓六拾錢　▲郵稅一冊四錢宛

一 日本開闢　一三 豐太閤

二 畝傍山　一四 七本槍

三 三韓征伐　一五 關ヶ原

四 聖德太子　一六 水戸黃門

五 菅公　一七 四十七士

六 九郎判官　一八 平田篤胤

七 曾我兄弟　一九 櫻田門外

八 惡七兵衛　二〇 七卿落

九 相模太郎　二一 彰義隊

一〇 楠公　二二 城山

一一 日蓮　二三 平壤

一二 大塔宮　二四 威海衛

巖谷小波君著

●世界お伽文庫

毎月一回發行

紙數一冊百餘頁　挿畵木版二十個入

菊判頗美本

正價一冊金拾參錢　郵稅一冊貳錢

既刊目次

第一編　大勇士　滿谷國四郎君畵

第二編　魔法鶴　梶田半古君畵

第三編　半分物語　茂木習古君畵

第四編　善玉惡玉　鎬木清方君畵

第五編　王取王子　鹿子木孟郎君畵

第六編　二人天子　久保田金僊君畵

續刊目次

第七編　强力太郎　小杉未醒君畵

第八編　活地獄　武内桂舟君畵

第九編　報恩鬼　渡邊審世君畵

第十編　化瓢簟　高橋廣湖君畵

小岩井規太郎君鹽田眞三君合著

●實用裁縫全書

◎和裝特製大判 紙數三百六十七頁
◎正價金五拾錢 郵稅金拾錢

吉田調子君編

●裁縫と編物

◎和裝大判 紙數二百六十二頁
◎正價金貳拾五錢 郵稅金六錢

近藤正一君編

●女子職業案內

◎洋裝三六判 紙數四百六十六頁
◎正價金四拾五錢 郵稅金六錢

造花技術校主 山田興松君著

●實用造花術指南

◎和裝大判 紙數百四頁
◎正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

刺繡術專門 磯村大次郎君著

●實用刺繡術

◎洋裝大判 紙數百二十四頁
◎正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

元學習院女子部長 下田歌子女史著

家庭文庫

全部十二冊
和裝大判大和綴
紙數一冊二百五十頁

▲正價 ●壹冊金參拾五錢 ●六冊金壹圓九拾錢 ●拾貳冊金參圓七拾錢 ▲郵稅壹冊金六錢

本書は一種超凡の新智識と新卓見等を以て名ある下田歌子女史の編述に成れるものなれば他の空論座談の書と異り上下を通じて一般社會の家庭上に適用するを得べきは勿論なり、而かして全部拾貳冊皆是れ編者が多年の實驗上より得たるもの、如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるか、江湖の諸君請ふ一本を購ひて以て驗せられよ。

第一編 ●女子書簡文
第二編 ●女子普通禮式
第三編 ●詠歌の栞
第四編 ●料理手引草
第五編 ●婦女家庭訓
第六編 ●母親の心得
第七編 ●家事要訣
第八編 ●女子手藝要訣
第九編 ●女子普通文典
第十編 ●女子作文の栞
第十一編 ●女子遊戲の栞
第十二編 ●泰西所見家庭教育

(發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館)

坂本隆哉君著

●衞生食物調理法

▲全一冊和裝菊判 ▲紙數百五十四頁
▲正價金參拾錢 郵稅金四錢

坂本隆哉君著

●病者の食餌

▲全一冊新形上製美本 ▲紙數百五十六頁
▲正價金貳拾錢 郵稅金四錢

八百善主人著

●八百善料理法

▲全二冊中版和裝美本
▲正價金參拾八錢 郵稅金六錢

龜井まき子女史著

●家庭料理法

▲全一冊洋裝大判 ▲紙數二百三十頁
▲正價金參拾五錢 郵稅金八錢

佐々木孝君著

●西洋料理法

▲全一冊洋裝大判 ▲紙數二百五十四頁
▲正價金貳拾五錢 郵稅金六錢

藤本藤蔭君著

●實用料理法

▲全一冊洋裝大判 ▲紙數二百八十四頁
▲正價金貳拾五錢 郵稅金六錢

元學習院女子部長 下田歌子女史著

少女文庫

全部六冊
和裝大判大和綴美本
紙數一冊二百五十頁

▲正價 ●壹冊金參拾錢 ●六冊金壹圓九拾錢 郵稅壹冊金六錢

博學高識女流の名家たる下田歌子女史曩に家庭文庫全部十二冊を完成して普く女子の心得ふべき事項を網羅し懇切に其學藝を指導せられたる故に世上此編を愛讀せらるゝ事他書の比にあらず今又少女文庫を記稿せられて少婦兒女の讀本に備へられたり文詞莊麗挿圖又精妙を極む

第壹編 ●お伽教草
第貳編 ●內國少女鑑
第參編 ●庭訓お伽噺
第四編 ●外國少女鑑
第五編 ●家庭の心得
第六編 ●學校の心得

(發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館)

116
276

每卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

洋裝菊判美本◎紙數各約百六十頁每卷口繪及寫眞版挿入

正價一冊金卅五錢郵稅一冊六錢

第壹編 醫學博士 三輪德寬君述
◉一般救急法
本書は三輪博士が美人にわかり易く親切叮嚀に講述せられたものであつて身體に急な異常の起つた場合に醫師の來るを待つ暇なく臨機に處置すべき方法一切を網羅してあります

第貳編 醫學博士 森林太郎君述
◉衛生學大意
本書は衛生學の意義沿革より土地、下水、埋葬、上水、都會、家屋、空氣、氣象、衣服、營養、等に分類し倘數十の各項に分ちて講述せられたるものにして各家必讀の寶書なり

第參編 醫學博士 林奉雄君述
◉藥物の大要
◉總論◉健康と病氣と◎藥物の定義◉治療の意義◉藥物の作用◉藥物の分量◉投藥の反覆◉製劑の精粗及理學上の性質◉藥物を用ふる場所◉局所の營養を障碍する有機化合體◉無機化合體◉神經質肉毒◉各論◉消化酵素並に滋養品

第四編 醫學博士 緒方正清君述
◉妊産婦之心得
◉緒論◉婦人の生殖器◉月經◉妊娠の徴候並に妊娠各月の徴候◉分娩日を算定する法◉胎兒の死亡◉分娩の種類◉正規分娩の經過◉正規の產褥◉妊婦子宮の位置の異常◉流產及早產◉妊娠と共に起る病氣外數十項

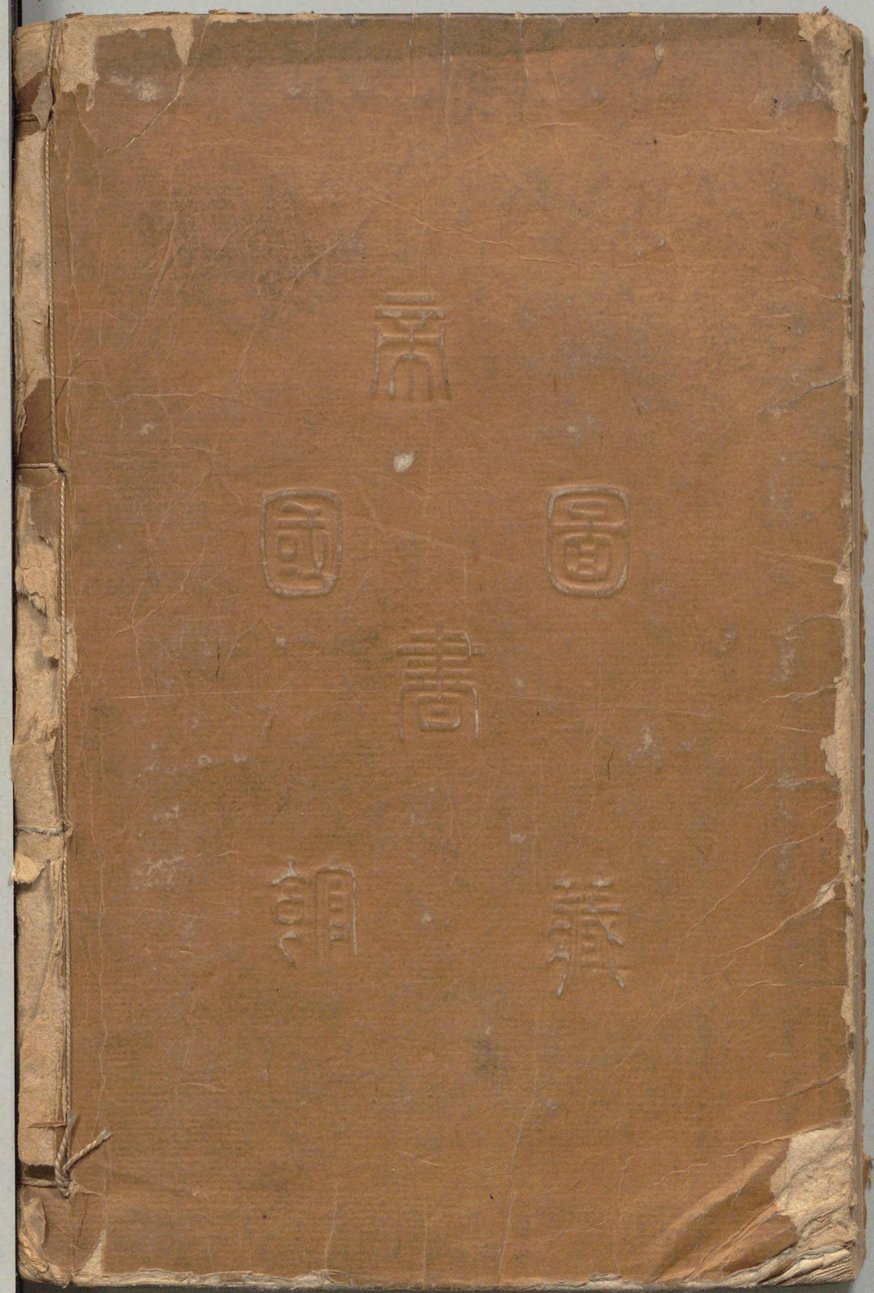
第五編 醫學士 笥井八百珠君述
◉花柳病講話
◉總論◉第一編梅毒（梅毒の傳染梅毒の經過の概要外二十三項◉第二編軟性下疳（軟性下疳橫痃腹痲性並に蛭行生下疳）第三編痲瘋（男子尿道の痲疾其他）

第六編 醫學士 賀古鶴所君述
◉耳之衛生
◉耳の構造と其作用と◉初生兒の耳の衛生◉兒童の耳の衛生◉成人の耳の衛生◉耳病の統計並に原因◉耳病の症候◉聽覺の檢查法◉耳の一般衛生法◉耳の洗滌法◉鼓室に空氣を通ずる法◉注意すべき二三の耳病其他

第七編 醫學博士 井上善次郎君述
◉傳染病大意
◉總論◉腦脊扶斯◉赤痢◉亞細亞虎列剌◉發疹窒扶斯◉痲疹◉猩紅熱◉痘瘡◉丹毒◉流行性感冒◉百日咳◉實扶垤里亞◉痲拉里亞◉破傷風◉急性關節僂痲質斯◉癩病◉ペスト◉狂犬病
……（以下續々刊行）……

發兌元 東京市日本橋區第一銀行貯金振替口座 博文館 東京市神田區三崎町三丁目十四番地

116
296


帝國圖書館叢